

新
改正月令博物考
正月部
一





貝原先生歲時增選
鳥飼洞齋翁編述

改正月令
博物筌
全部

此書吉甲子年彫刻スレトモ
抄稿駁雜ニシテ且傳寫ノ誤
少ナカラス故ニ此度左ニ録スル
諸先生ノ校閲ヲ經テ再訂ナ
シ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書
正シクナリタルヲ好タニテ佳作
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

音

一年三百六十日日
日無邦無故實時令
娛遊及國風偉哉抄
録収細帙

262
筱應道題

音

採觚箋費細
工夫業就堪
供詞客厨時
令天文盤托



出能魚仲木
帙分區藝色
它又帳中秘
張說示生掌
裏附寄語風
流多執子休
為博物小人
儒

南豐題



日初月為是
事浩瀟古性
正々備哉燦
爛

恒樂

筆一文字...
かきし...
かきし...
かきし...
かきし...

水滸竹腰氏

道孝

世にあらざるもの
すくなくも
かへりて

流と見えよあはれ
と成 宙より
ころり
そのらう

華洛
得閑齋雜

世にあらざるもの
くあはれ
亮し
あはれ

月や日々を
井眉
のこころ

○俳諧大意並口傳

一此書の詮とる処の歳時月令の正節と明らかと改小曆○二十四節禮記之月令と肇小記一草木花実の時日と不差記と詩歌連俳の季節と定るもの相違せり
りのり故不各傍不用々用ゆる
印を委し

一連歌俳諧者流小季と定め節と究むるは原来懐紙一順の見渡しの為か二條家ふるくその分置れ小後普光園攝政新式と著し給ひ後常恩寺太閤迎かいたるは肖栢老人今案ど加るるれて其式既定よりたへ
バ和歌小年内立春ハ春をれども連俳ハ冬と守杜若ハ和歌ハ春をれども連俳ハ初夏と守○牡丹ハ春も出夏もせりものあり

順和名	筑波集
大和本草	本草綱目
本草拾遺	花鏡
卿茶本草	採取月令
月令廣義	輟耕錄
三才圖會	前後漢昏
階昏	唐昏
梁昏	後晉昏
字彙	爾雅
博物筌	五經
四昏	法花經
涅槃經	華嚴經
杜律	李白集
白氏文集	唐明詩集
文選	

引各目錄終

月令博物筌 大意

一此書正月門松ヲ立ルリ年終迄
 年中ノ歲事故事ヲ集ム上録中
 公事故實ヨリ下民ノ諸式法月
 異名草木・鳥・虫・獸等迄不
 殘集メ来由故事ヲ述譯ヲ委レク
 記レ異名・漢名迄不洩集二月
 一冊トシテ正月ヨリ十月迄ヲ分ル
 一草木種類花形其外何ニ依文ニ
 テ分リ難キモノハ夫々図ヲ出ス
 一條毎ニ哥・哥ノ詞・連哥・俳偈・
 在哥・詩・詩聯・故事ヲ夫々ニ委シ
 作例證據トス
 一生花ノ正式衣服ノ正式養生法・食
 物善惡・料理・献立・年中ノ吉凶・米
 一豊凶ヲ知法・草木植様・菓物
 貯ハシ・妙術・妙薬・風雨ノ考
 等何レモ月々日々ニ記ス
 一年中ノ公事祭・草木・生類其外何ニ
 不依是迄能偈ノ季ニ用ヒ来物ハ印

ヲ付ル但正月季者物二月至用物ハ
 ③印ヲ附ル十一月正氣者春ニ
 成非冬成物ハ其餘下ニ註解ス
 四季折々遊山翫水等ノ手紙ヲ其
 節序ニ如ハ尺牘ヲ寄テ付英上中下
 ノ各替ラレシテ漢文ヲ作ル便リト
 漢文淺学ノ人ト雖此各ヲ見レハ
 即時ニ文章作ラルヤウニ設タリ
 此各雅俗日用重法ノ各ト魚元來ハ哥
 ヲ詠能借ラ作ル久為ニ撰公存ナリ故ニ
 七上候ハ毎月六候ガ出ス右來ル生類
 七上候也草木七上候有他各ニ無キ物
 ナリ此本六出外ニシテ委多註解ス其
 外是追他本ニキ季成物多出古
 哥ヲ如ハ作例トス
 一詩詩確詩聯尺牘ヲ出詩作ニ便故
 ニ哥人能人詩人傳學ト魚失念ニ備レ
 右此各大抵ラ筆ケ示ス年中ノ事
 多品類ナレバ一々例ヲ記スニ暇アズ次ニ
 門部分ク大意ヲ記ス

大意終

門部分並目錄之註

正月

始ラの九の印ハ其月の
 干支・八卦の其月不當る卦
 調子の其月不當る律呂・陰氣陽
 氣の生じる数と記一次其誤と解

節立

此九の印の内ハ其月の節
 七十二候・草木七十二候・昼夜
 の長短・日の出入外の方角と記一次
 右の註解と委一々存ク

中雨

此九の内節より十六日中ニ七
 十二候日出其外品出ト夏節同

日令

此部ハ其月日定リたる事ハ夏行
 事・五節句音・諸祭・風雨の考
 養生の法其外日の定ラる入用の事と出

月令

此部ハ日の定ムル事と其の
 月一ヶ月の事とあり

時令

此部ハ時氣拘リたる事と出
 譬ハ正月ハ初春・餘寒
 等の事又三月ハ暮春・三月

天候時侯かかる事とのと

草木

此部は其月の草木と集む但妙茶ある物の病症用いやくと記す

生類

此部は其月の魚鳥虫獸の諸の生類とあつじ

必用

此部は日の定まるる其月一ヶ月の養生の法・風雨の考・米の豊凶・妙術・天氣占候・料理献立其外入用の諸の雑事とあるす日の定まる事ハ口の日令の如ニあり

故事ハ如此かここの内ニ有

白字小しる丸しあり

此のどくたの妙業なり

詩哥連能の始め此のよたまるあり次ハ一めりあるあり

異名又讀の始め妙印あり

日々養生の法・風雨の考・五穀諸品の高下・季と持以諸祭・妙業・妙術・詩哥連能故事其外日々重法ある雑事ハ部ハねね多あるめ目録ハの口と本文と見て知べし

正月部目録

印ハ能借の季をりの物あり

養生の法・雨風の考・米の豊凶・妙業其外人家重宝の事ハ知々あるゆへ目録ハあるとん

發端

春の異名 春の由来

正月

調子 陰陽生 興名

正月古今違

立春節

若水

雨水

日令

此部ハ正月日の定まるる事と集めあつじ

元日

元日異名

元日賀

四方拜

星と唱ふ

屠蘇白散

朝拜

院拜礼

元日節會

諸司奏

七曜御曆

水様

腹赤

國栖奏

△菌固 正 幸 △鏡餅 正

△門松 正 幸 △注連飴 正

△大飴 正 幸 △惠方 正

△門神棚 正 幸 △蓬菜 正

△雑煮 正 幸 △料物 正

△太箸 正 幸 △開豆 正

△加賀御草 正 幸 △鱧鱒 正

△押鮎 正 幸 △依海岸 正

△小殿原 正 幸 △海麩 正

△螺者 正 幸 △掛鯛 正

△葩煎賣 正 幸 △年男 正

△大福 正 幸 △福藁 正

△庭竈 正 幸 △福鍋 正

△幸木 正 幸 △鬼打木 正

△毘沙門 正 幸 △若戎 正

△星佛 正 幸 △懸想文賣 正

△初鶏 正 幸 △楯積 正

△初夢 正 幸 △三物連歌 正

△三物俳諧 正 幸 △祇園削掛 正

△初春 正月日の定まりさる歳旦と
とあつるりのとあつる

△若餅 正 幸 △破魔弓 正

△羽子板 正 幸 △胡木比子 正

△毬打 正 幸 △神毬打 正

△宝引 正 幸 △年玉 正

△書初 正 幸 △去年今年 正

△毬はく 正 幸 △御降 正

△三ヶ日 正 幸 △松の内 正

△春永 正 幸 △藏閑 正

△湯殿始 正 幸 △弓始 正

△ひめ始 正 幸 △馬乗初 正

△着衣始 正月 △層開 正月

△春駒 正月 △年礼 正月

△鳥追 正月 △大黒舞 正月

△諷初 正月 △春鳥囀 正月

△乘初 正月 △駕来初 正月

節 正月 △節小袖 正月 櫛飯 正月

△歛初 正月 △水祝 正月

△籙初 正月 △御慶 正月

△歳旦句の説 正月 △初十日 正月

△若菜 正月 △七種若菜 正月

△初寅 正月 △初夕 正月 △知杖 正月

△二宮大饗 正月 △朝觀御幸 正月

△臨時客 正月 △告朔 正月

△真那切初 正月 △商初 正月

△天狗酒盛 正月 △船玉祭 正月

日三 △たろやく 正月 △裏白連歌 正月

日四 △鏡開 正月 △福日 正月

△飛鳥并蹴鞠初 正月 △叙位 正月

△木造初 正月 △万歳 正月

△猿引 正月 △天寿生身供 正月

日六 △六日年越 正月 白鳥節會 正月

△御弓奏 正月 △御修法 正月

△七日正月 正月 △菜摘川神事 正月

日八 △御齋會 正月 △大元師法 正月

△真言院御修法 正月 △女叙位 正月

△女玉賜祿 正月 △空也堂鉢叩 正月

△箕面富 正月 △吉谷奏 正月

△居籠 正月 日十 △帳釘 正月

日十一 △夷祭 正月 △常陸帶神事 正月

日十二 △御具足鏡 正月 △具足鏡開 正月

△縣召除目 正月 正月 正月 正月

△花朝節 正月 正月 正月 正月

△住吉御弓 正月 正月 正月 正月

△踏歌 正月 正月 正月 正月

△十四年越 正月 正月 正月 正月

△土龍打 正月 正月 正月 正月

△御薪 正月 正月 正月 正月

△平岡御粥 正月 正月 正月 正月

△御徳祭 正月 正月 正月 正月

△女踏歌 正月 正月 正月 正月

△明神々詠 正月 正月 正月 正月

△禁裏伶人の舞御覽 正月 正月 正月 正月

△賭弓 正月 正月 正月 正月

△吉田社清板 正月 正月 正月 正月

△元日だんご 正月 正月 正月 正月

△解齋御粥 正月 正月 正月 正月

△削花 正月 正月 正月 正月

△頭梳綿 正月 正月 正月 正月

△繩引 正月 正月 正月 正月

△三柱打 正月 正月 正月 正月

△赤小豆粥祝 正月 正月 正月 正月

△上元 正月 正月 正月 正月

△獅子頭神事 正月 正月 正月 正月

△走百病 正月 正月 正月 正月

△十六日櫻 正月 正月 正月 正月

△籠后神祭 正月 正月 正月 正月

△元日正月 正月 正月 正月 正月

△嚴鳴祭 正月 正月 正月 正月

△内宴 正月 正月 正月 正月

△初天神 正月 正月 正月 正月

△正月令 此部は日目の定まりたる正月の事とありむ

△外記政始 正月 正月 正月 正月

△偶假師 正月 正月 正月 正月

△初芝居 正月 正月 正月 正月

△歳且開 正月 正月 正月 正月

△正月男女衣服式 正月 正月 正月 正月

△時令 此部は初春の時候より初春の事とありむ

△初春 正月 正月 正月 正月

△春雪 正月 正月 正月 正月

△山笑 正月 正月 正月 正月

△草木 此部は正月一ヶ月の草木の事とありむ

△松の花 正月 正月 正月 正月

惣て本朝の古言古訓と云万
葉日本紀古事紀ふよりてとるべし
或説ふ春とつるハ晴とつる・空麗
小晴るとつる心ありとつる

春異名

太皞 青帝 青皇
東君 勾芒 蒼天

青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光

○太皞と云ハ唐土伏羲帝のこと

本徳の君と云ハ唐土昔より世々

小日本の年徳神と祭るが如く春

乃初小祀と云ハ禮記月令云太皞

伏羲木徳君云○青帝ハ春神

ありと楚辭小見と云○青皇も

春の神と青皇恩澤無窮限

なと詩小作と云○東君郊祀志

曰晉巫祀東君顔師古曰東君ハ

日の神なり○勾芒ハ少皞氏の

子重と云ハ木神也春の神

と云太皞と合せ祭るなり

○蒼天と云ハ氣の初て發して

色蒼々としてとめて稱と云○青

陽ハ天地の盛徳春ハ木ハ有る木

色青々として以て青陽と云○陽和

と云ハ白居易詩小先遣陽和報

消息と有るなり○花蓋と云ハ

夏侯湛が賦ハ春可樂兮綴雜花

以為蓋と云と云○迎陽と云

立春と云ふなり○韶光と云ハ

美也云春の景色のうらやま

と云○猶漢書律曆志ハ媚景

或ハ韶景といふもこれなり

と云○珥通ハ續漢書小見と云

○解凍と云ハ礼記の月令小春

と云○新陽ハ詩學大成小出

と云○微和と云ハ陶淵明が詩小出

と云○華始と云ハ礼樂志小出

と云○歳始

ハ公羊傳小見と云○養生と云ハ律

曆志小出と云○木徳ハ震官初

動木徳唯仁

と有陪青帝 春為主東方

云ハ易の說卦傳曰帝出乎震
 齊乎巽又曰萬物出乎震震東
 方也又曰兌正秋也萬物所說
 也これとこといハ震之正春也
 〇明者〇陽ハ仁者の徳小
 して春陽の氣ハ仁の道と守
 蒼天といハ春の東方の正色蒼々
 然として晴故蒼天といハ〇卦ハ
 震はて震ハ木の象〇色ハ木徳
 青緑と主とハ故ハ青陽ともいハ
 礼記ハ春ハ東郊ハ青馬七
 匹を用ヤといハ〇精ハ蒼龍といハ神ハ
 体精ハ用也春の用ハ能發生と龍ハ乾
 の用はて陽の靈ハ能動發ハ速ハ盛
 象ハ少陽ハ陽少陰ハ陰の四象の
 初ハ春の氣ハ是ハ小陽ハ厥陰ハ加ハて
 六氣と云〇味ハ苦ハ酸主とハ〇肝ハ木屬
 春ハ肝ハ旺とハ死氣ハ肝ハ入とハ
 〇右の外春三月の季乃りのハ三月
 の部乃ともいハす

正月乃部

〇十月地中に
陽生十二月
三陽生正月
〇十一月小
子の月とす十二
月ハ正月寅



異名

限月 瑞月 孟春 發春
 獻春 規春 開春 上春

初春 發歲 三陽 初陽 暮新月
 新陽 謹月 太簇 夏正 睦月

〇正月と一月といハて
 〇正月と一月といハて

異名註

〇正月と一月といハて
 〇正月と一月といハて

〇正月と一月といハて
 〇正月と一月といハて

氣ふて万物とてみ生じり心あり
○限月といふ亦雅言正月の夏と

いふ限の寅のくろみなり○夏正と云
唐正夏の代り寅の月と正月とする

ゆへ名づくるなり○睦月といふを
清輔奥儀おのころに如く貴き賤き

ひつまいゆひとまゐるなりゆひの月
とて畧してさるるる○暮新月と云

新れて新き月とあり故名づく
○太郎月といふ俗人の子に初生

ると太郎といふはさぶ生きたるを
次郎を名づく故正月の初月故名づく

○初正月 藏王
唐正のころ正月の朝日くけ

のどけこ色やさふるをいふ
○初空月 後鳥羽院御製

きりかみするやからまま
さるる申のころを乃月

○初 瑞月 御集
まのまをくくよをあらぬまの

いざらにふるふの初乃月

正月古今違

一年十二月の干支を
定む其月の中節

斗柄星の斗柄建卯の干支とて
定む斗柄のねまはとて俗

正月中節斗柄星の斗柄寅寅建故
正月と寅の月とさるるなり

○唐正。夏。商。周。右三代正月別々
夏の國禹王の世は寅の月とて正月

今の正商の湯王の世は丑乃月とて正月
とて今周の文王の世は子乃月

とて今漢の正月と定むられとて
一理ありまをり天を子小開くとて

周の子の月と正月と定め地を開く
少商の世の月と正月と定む人の寅

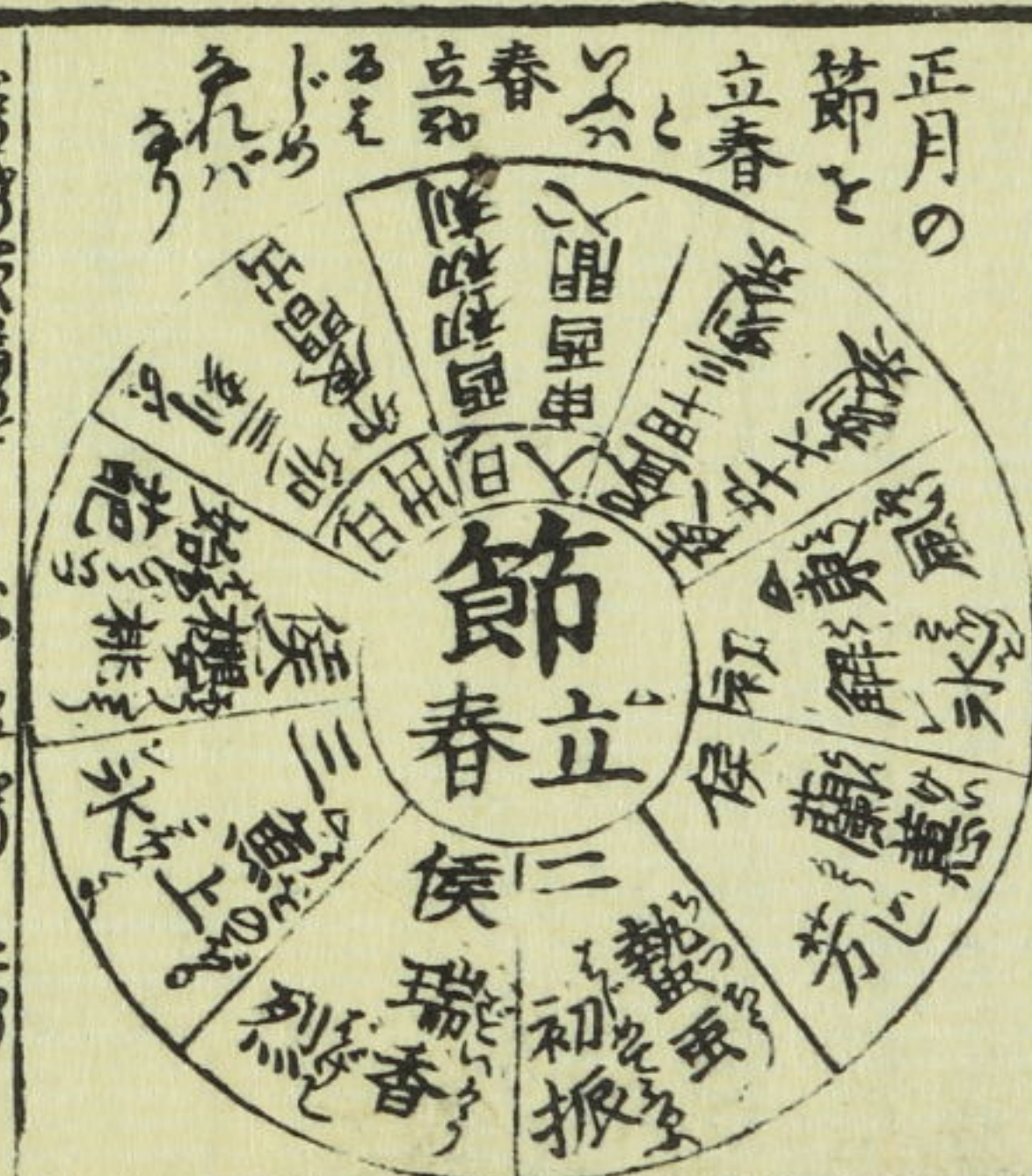
定む少夏の寅の月と正月と定む
天地人國を初め其後秦といふ世

て古典と悉く改めて亥の月と定
正月と定む今漢の代も是あり

し武帝の時始て古代の通り改め
寅の月と正月と定めより今亦定む

本朝の神代より寅の月と正月と定めて變じざる夏也此論春秋正月考と云る書小委しかりりた事あり見さべし

節 立春の七十二候の草木七十二候。昼夜長短の日出入等左記と



△東風解氷といふ冬の寒風も水も春の東風と受て解初く。蘭蕙も風蘭也。蟄虫の冬虫の地中より出る。瑞香の春の氣にてそろく出る。瑞香ハ遊といふ。櫻桃ハ庭櫻なり

立春天氣 立春は北方か紫緑白の雲

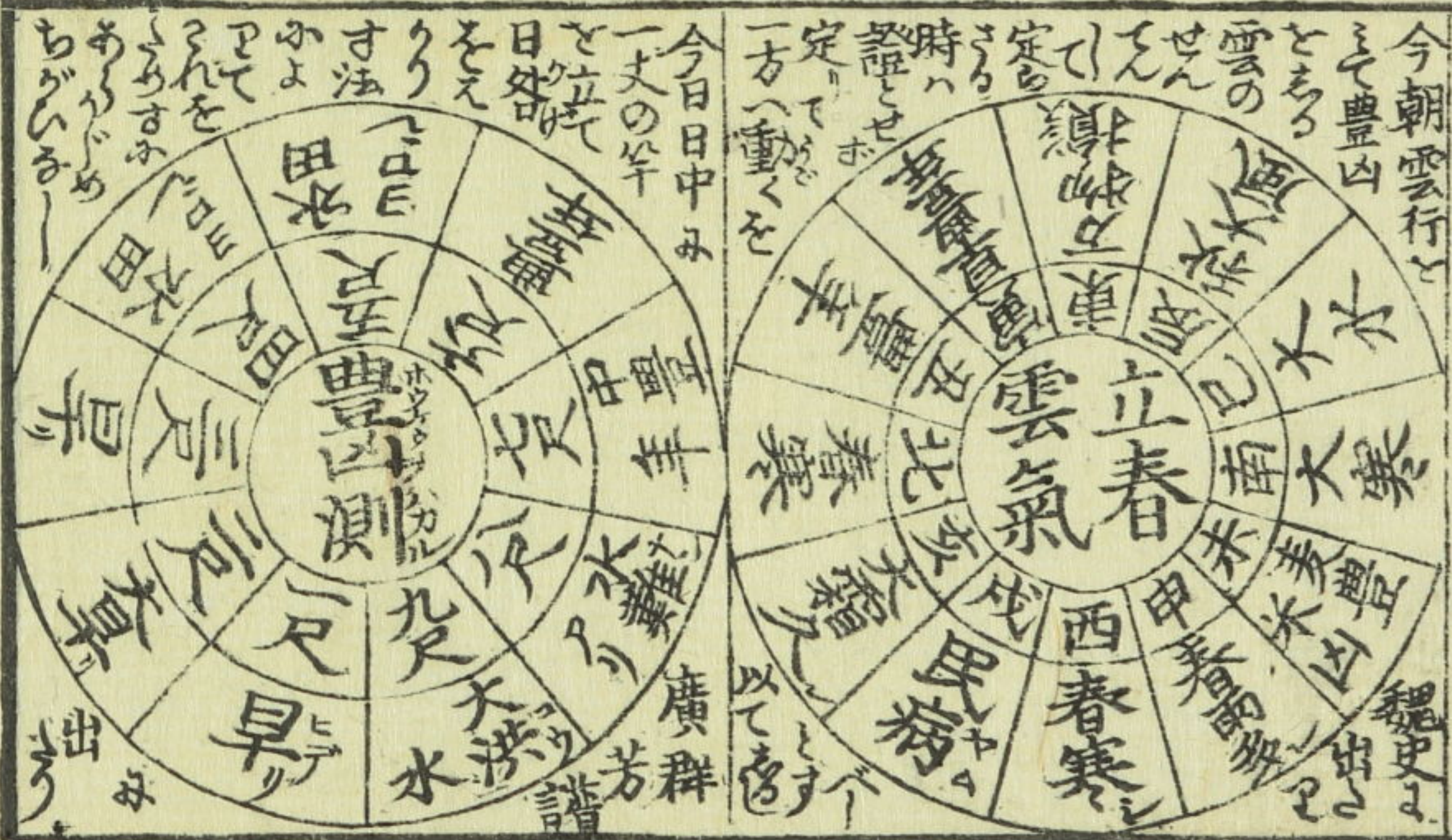
わまは三素飛雲と云て三元君天上に詣ると日なりけりて再拜とて必ず福ありと隨書に見たり○三日晴天を豊年○前後三日の間風雨少むまは其後四五六日の間天地の氣とのいて万物ははりさえ又人の身も安全めで病少とさう若又四五日と前も雨のまは其後四五日風雨おなく四五日後は風雨あはれ **立春占候**

此日四方は黄き雲氣をまを五穀よく實のる青き雲氣あまは虫五穀とやがる○日いよも出ざる時東は黒雲あまを春雨多し西はあまは秋雨多し北はあまは冬雨多し○東方は

青雲あれ雨多し赤雲あれ
夏はどろけ米乃あつ貴し

立春雲氣

今朝雲行くと豊凶
今朝と云は日出時の
事次の九と考ふ



立春

正月の廿九日 元日のま
あつる時能くは正月の季用

哥 千五百番哥合立春 通具
今朝と云は雲氣のまの弦をれて
みどりけふふまはれ初そ

新古今

攝政大政大臣
みどりけふふまはれ初そ

雲葉 立春 人丸
よまふふとくもつげに相坂乃
ゆへはけをばたきけしそま

千首 立春風 為尹
まといやまなる波のまこそすけ
それともびそそ川をそく

金槐 海辺立春 鎌倉大臣
振ふの浦は風くひむか
ハ十ねふけそ春やうけらん

草庵 立春氷 頓阿
ななくふふまはれと山川乃
雲氣をばもまはれにたり

万代 忠見

長春ふるとのみほひく人ほ
うしれあやうとあやうあ

夫木 曉立春 家隆

あつ玉はふくせのまの初めと
ハ一冬のもももをいふかり

龜山聖旨 立春日 六条有忠

年とゆるくあつてくさくさ
老せぬまがたがくさくさ

夫木 西行

とま山もほほくさくさ
こわりさたかくさくさ

龜山殿旨 立春日 後宇多院

くさの天け春之山おほくさ
まさくさくさのまがたが

同 立春日 同上

足利の山はほくさくさ
日新いほくさくさ

夫木 山立春 知家

いとや山天のまより今くさ
あつ玉ま井かまのくさ

立春日 素然

ほのほのほくさくさ
あつ玉ま井かまのくさ

詞 立春日 本末 立春日 寿 志

くさくさ 初日新 氷りかま

せぬま 辰初 打あひさ

春のま 千代まぬき

花のま 志まじり

春まらま 志まじり

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

くさくさ 初日新 氷りかま

立春故事

鞭春牛 前一日

開封府ヨリ春牛ヲ進テ禁中ニ
テ春ヲムチハスル義ニ取

ナリ百姓皆會春 デイキウ 泥牛 ニウ 年 ネン
牛ヲ賣ルトイヘリ

ヨリエニテ牛ヲ作リオキ サリ 綵 サイ
寒氣ヲ送ルイ月令ニ見タリ

燕 エン 歲時記ニ立春ノ日悉ク シク
綵ヲキリテ燕ヲ作リテ

宜春ノ文 チン 賜綵勝 タラ 唐ノ朝 タウ
字ヲ貼ス チン 廷ノ制 テイ

ニ立春ノ日侍臣ヲ望春官ニ シ
召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝

花トテ作リハナヲ賜フ由 ユ 農 ノウ
文昌雜錄ニ見ヘタリ

祥正 シヤウ 農祥ハ房星ノ精ナリ ナリ
正シトハ農ニ南ヲ加

ニアラハルコナリ コ 葭灰ヲ飛 トク
國語ニ見ヘタリ

立春ノ日芦ノ葉ノ灰ヲ律管ノ ノ
端ニモリミテオケバ春氣至ル

時其灰オノツカラ飛ヨシ委 シ
シク事文類聚ニ見エタリ

歌青陽 ウタ 後漢書ノ祭祀志ニ シ
云ク立春ノ日東ノ郊

ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服節 ノ
ナ青シ青陽ヲ歌ヒ雲轂ヲ

舞フトイヘリ ノ
歌曲ノ名ナリ

詩 立春五字對句 シ 同上

詔光開令序 シ 惠風初應律 シ
唐ノ則天春ノ時令ヲ云

淑氣動豐年 シ 和氣正調梅 シ
春ノ溫和ノ時令

詩 立春七字對句 シ 詩 礎

三陽候節金為勝氣象新 シ
立春ヲニチエタル

百福迎祥玉作杯應陽春 シ
春酒ヲクム

若水 ニク 新氷去年の生氣の方井 シ
を鎮トシ蓋を以テ人ノ汲

せど春ノ日主水司内裏 シ
奉之ハ朝餉トシ之れをきま

正月若水元日立春詩曰正

方り新玉の春より日奉き若
水といふ去年より井を封じ置
包井開くともいふ世俗母若水を
元日とする季は三丁めあり

義君の彩や川よりわらわらん
いとやふけの初めらん俊頼

元日立春 万葉
け夕夜ふれびくまふらじも

建長哥合 立春 頭朝
わら玉のひも月日そ移るる

連 春までこがひらの始めか 春
俳 ちか下はまけの春宗因

狂 古今夷曲 哥慶
春ふるといふよりより大ぶくの
あはれも度そそけさのゆらん

○哥の詞ハ立春ぬて見合用也

詩 元日春五字對句 同上

春城映朝日 緑仗迎春日
日カゲアキラシクナル

緑柳揺春風 細煙接瑞香
ソヨリタタラシクニサエニセツススイカウニ
ヤナキモンゾイタス

詩 元日立春七字對句 詩礎

瑞色含春當正殿 轉緑蘋
スイレヨクフシテハウラタリセニテスリヨヒラ

香煙捧日在高樓 瑞色新
カウエンサゲテヒラカクノウニ
アタカクコノ

瑞氣朝浮五雲閣 紫氣中
スイキアヒタニカクゴウナンカク
アタカクコノ

朝光夜吐萬年枝 曲迎春
チヨウクツヨルハクバンチノエタ
イシヒサレタカハラヌク

春風掩映千門柳 四海中
ハルニフタニエスセンモンヤキ
シカイノチキ

曉色融和萬井煙 象昭回
キヤシヨシククスバンセイノケリ
カネルヒヤダニ

散臘迎新淑氣回 一年程ナ
サシロウシラヒテヒラキ
ク暮レテ

正月 年內立春詩 哥 正九ノ十

又春ニ立テ乾坤此日泰初開

カハルトナリ 乾坤此日泰初開

正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハ

レ地天泰ノ卦トナル其始ハ元日也

庭前積雪徐々化 天地ノ陽

雪モツロクト 天上和風習々来

ケラヌルナリ

ソラヨリ吹ク風モツタカニソク吹来ルナリ

年內立春 元日よりまゝ今春乃

△十二月 節あるとといふ連能

小の十二月の季と定むと云ハ

和哥の式ニ據リて此處より出と

詞 續古今 入道前大受大臣

吾等々々山いかにあはれも

とけ内なるまゝ乃あけがの

年。その内ふ。春よりまゝ今

さう。そのまゝまゝ。從のまじ。

年ハ深イハまゝまゝまゝまゝ

連 履をいふを春より祭 宗祇

非 履より履根より下午二月ツ婆

春ニツ見おろと最まの一夜は淡々

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスム

トヨリ長生ユハ日月モ 仙人ノスム

トコシナヘニメグルナリ 送臘

迎春亦寂然 冬ハクレ春ニ

コトモノクモノレツカニレテ各別ニ

アラタニリタルコトモナキトナリ

翠管銀鈎傳故事 仙宮

器ヲモテアソブコトハ常ノコトニテ

故事ヲアマタ云ヒツタフルナリ

金花絲勝作新年 金銀ニテ花ヲ

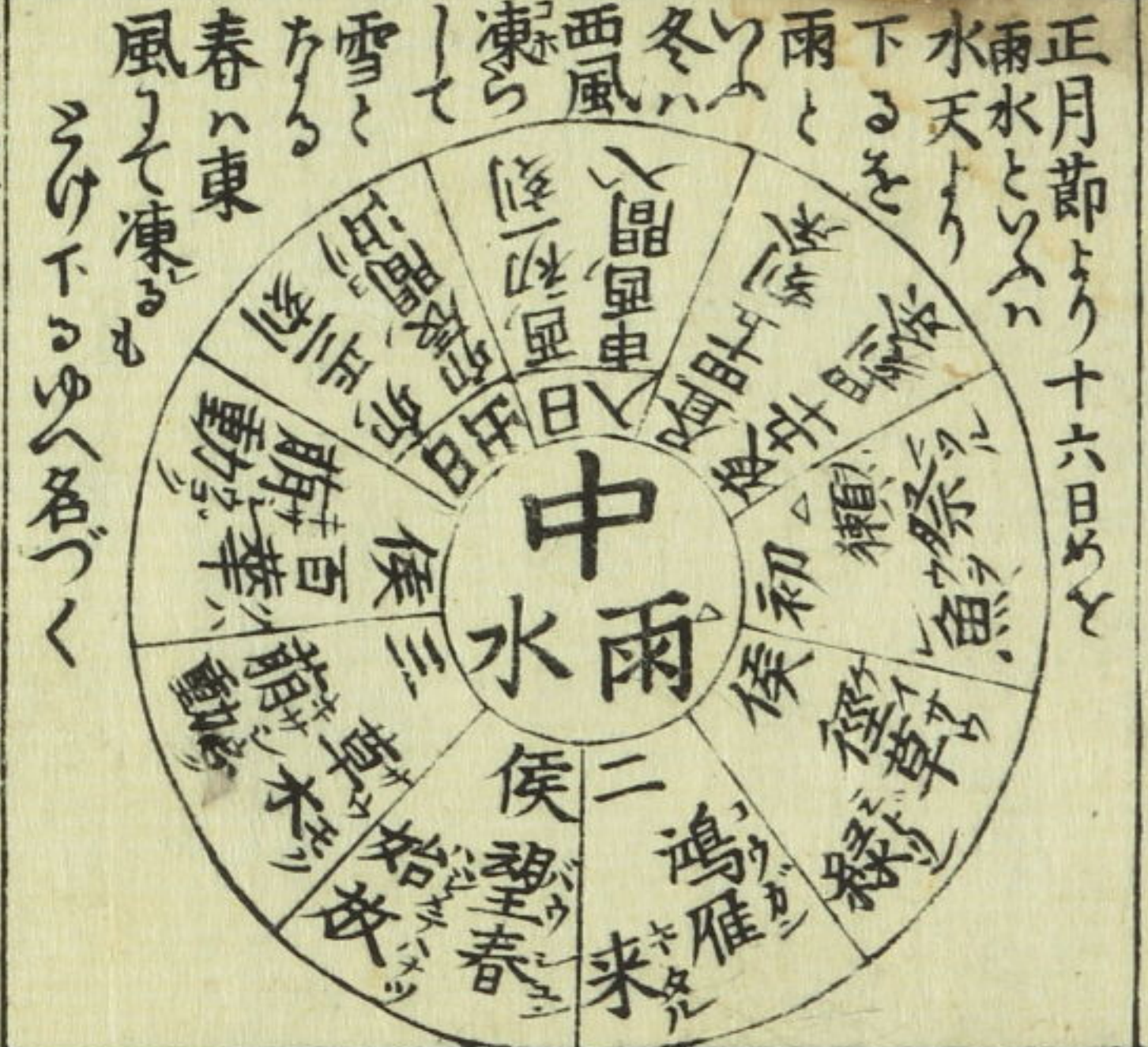
瘵病と除く方 立春ののらめ

子の日蔓菁を搗きぼろ汁を

とりわさめて家内とを

小服とれば疫病を除く

中 七十二候。草木七十二候。日出入 昼夜長短委しく尤ふ記を



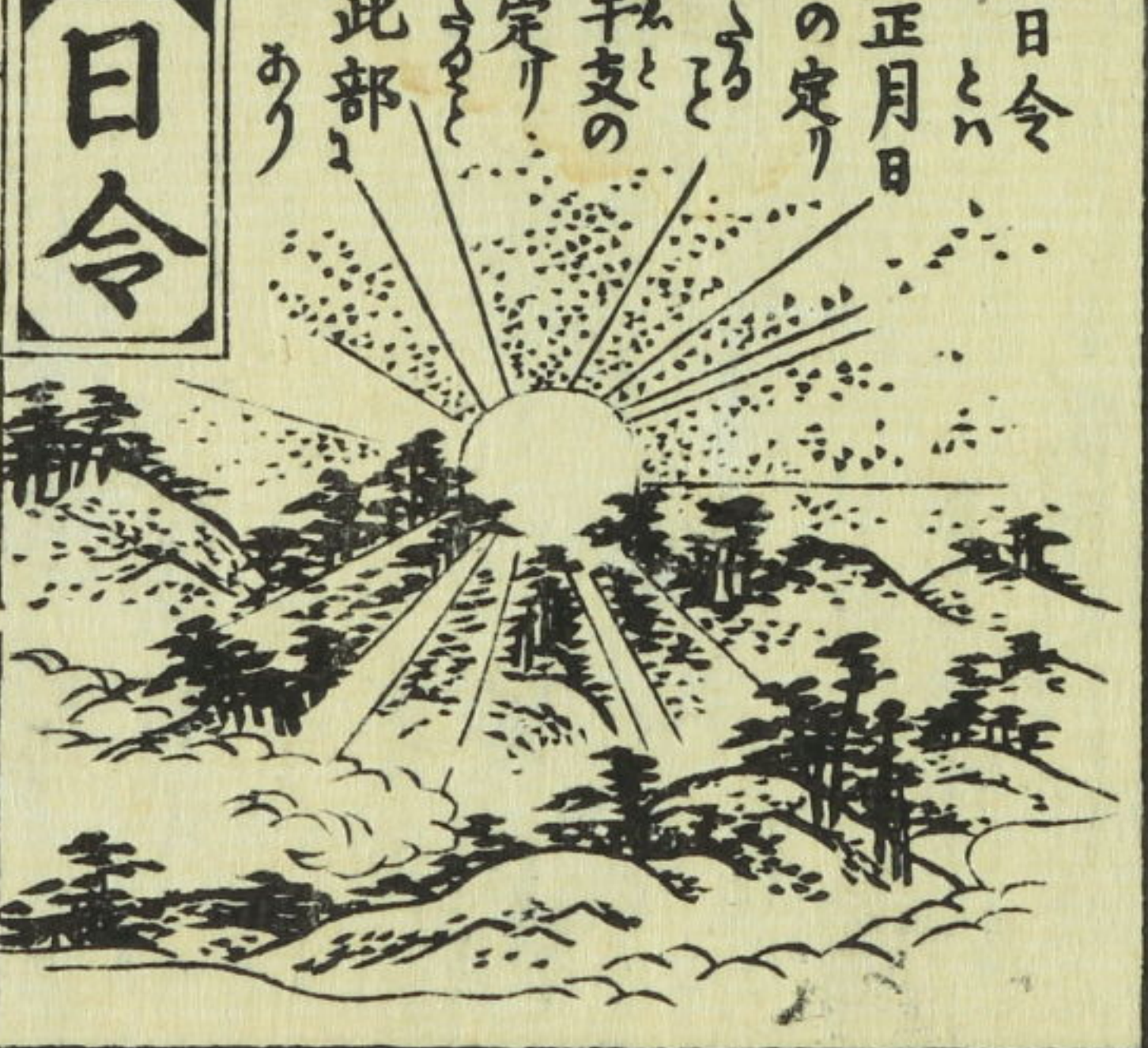
正月節より十六日まで
雨水と云ふ
水天より
下るる
雨と
冬
西風
寒
雪
春の東
風して凍るも
この下るる名づく

懶ハ常小魚とて喰ひ命とほさぐ
ゆハ其息を報じるとて春のこト

冬小魚をとりて祭るあり
徑草ハ道辺の草也昔々成 鴻雁

のうの事ハ陽氣小るんハ次第小南より北へ
歸之ハ望春始放と云夏 初二小ハ霞
初二動と者 草木

百花陽氣惠れて梢芽立ち萌動之
熊櫛のなるるをてまよせし其 蕉翁



日令
正月日
の定り
干支の
定り
此部
あり

日註證哥ハ昔
方朔ハ占書ハ出テ八日迄悉ク
名あり其日天氣和順され其
名づくる所のものさうるとあま
ども其理通ハ此事實原先
生日本歳時記ハ未タハ衆あり
見るべハ面白ミ事なり

天氣 元朝々々大雪多ハ
旱年とあまハハ晴天

春の中人民病ありたゞ大風多
 ども北風吹ば春の中多く病あ
 るべし○終日北風吹ば其年とや
 病のさしある事あり○南
 方より風吹ば早夏の事あり
 ○今日大風吹ば蚕破きて糸の
 價貴し又五穀のさす○天晴
 くと援けりて風ふきれば五穀よく
 熟して米價賤しく人民安全
 のて病もさくゆとあり○今日
 雪ふれば豊年又 **占候** 元日甲
 早とつらさくふ **占候** 小あて
 まは米價賤しく或いは人民疫
 病を煩ふありつふあれば米價
 貴し或いは人々病あり丙ふあ
 られば四十日の早かり下はあ
 らまは終綿の價貴し **占候**
 ありし成ふあれば麦粟魚塩
 の價貴さくあり或は早りとる事
 四十五日をり巳ふあれば米價貴

られば年ゆさつて人民安し
 風雨されば米價貴し○微風
 細雨あれば梅雨の内日和長し
 秋洪水あり○三ヶ日の間風雨
 みるくありて日色と見れば二年
 の大美をたつこと候○四方晴天
 うらかあると豊年と雨みも
 わびしく黒くありて陰々たる
 し又美あり○東風吹ば夏に至
 りて米價賤し○南風吹ば春
 より夏ふりて米價のさく
 又早をほりさく西風ふけば春
 より夏の米價貴し豆ハ能實
 のさく北風吹ば水の災あり○
 今朝東北より風吹ば五穀熟し
 て年豊あり西南の風吹ば大水あ
 ると耕作のさくびとる東南
 の風り南風り吹ば雷鳴て寧
 かりす○今朝北より大風吹む

く或ひの蚤あり或ひの雨風多
し庚かあされが金鉄の價貴し
或ひの秘実のり又人の小病あり
辛かあされが麻麥の價貴し或
ひの秘大よ収る玉ふあされが米麥
の價貴し癸かあされが秘小災
あり或ひの人民疫病
を煩ひ又雨多し
十二月

晴雨考

元旦水茶碗一杯
杯汲之其目とけ

をき二日ふも又水茶碗一杯
汲之目とけけあろるるにその
水元旦ふるまふ水より
重き時其月雨おほく輕
きと死の晴法を二日免え
二月三日免え三月四日免え
四月と次第く小より十
二日か布て見きは十二月
までの晴ましく雨
ととあろるるあり

元朝八方の風
を以てその
年の美惡
を漢書
出たり
風はよれ
あろるるは



元日賀

今日を賀する始
本朝ふて神武天皇

の御宇より始る唐土ふて漢
此世より千のてあまを
日本より四百年をり後のあま

元日異名

註證哥奥
三朝

三始三微三元四始元旦
正日青呂雞旦雞日正朝

淑節詔節嘉時初正初陽
更始履端天臘上日聖日

改旦歳日元三年頭初年
新き年明る年立あ

玉の年羊の始
三の朝日れ始あ四方拜

元旦の寅の時皇の屬星と
とねへ天地四方の山陵と拜し

その年の災と拂ひ宝祿を
祈り申さる事小侍ふるや

清涼殿の東階の前へ屏風
としそ白木の机に香花と立

行いふ根源星ととる年中行

合ふいり當年の星本命星
をよみ七返はくとかへる事

とるといふ今在家の世俗星
佛として祭るも其まゝろをへ

るふととる年中行事奇合
ととるまの星ととるるまは赤

光りのとひき供御藥天
まのまはたり

畫の御座ぬ出御さうて御衣
を御生氣のこの色ふりく

まをひて菓子といふと嫁
せざる小女よ先香し先を

屠蘇小児よりのみ其後銀器
初る月の故小女より初る

はるり屠蘇と奉る二献小
白散をす先奉る三献小度

瘡散をす年中行事毎かきまのそむる
菓子いりえつとん君うぬとか

屠蘇白散嵯峨天皇の弘
仁年中に始て

これを行つ一人をまを吞むを
を一家病さし一家これを吞ぬ

まは一郷病さしとらう歳時
記ふらういひう道士毎年除夜

母間里小来つと菓子一貼と贈り
紅の袋よ入きて井中いひこしめ

置杓元日其袋を水中よりとら
あげ酒ふ和してこれを吞む瘟疫

を病むとらう屠蘇はあるとま
蘇いよとらるとよむ邪氣をか

ちりはちり人の神とよまぐら
ととらふの理なり醫家に多く

上ノ点を加へて屠蘇と書く
さき尸ハまうづひとむ字を
ゆへ思避て尸小書とす
此某方より十二月の部あり

非松の子は冬末を共き一會月
松をふまぬ時とる冬の高

詩 屠蘇酒 紫府仙人授寶方
仙人ノ住ム所ナリ宝
方ハ屠蘇ヲ指ス 新正先許少
筆嘗 屠蘇酒ハ年始ニ先
少年ヨリ吞初ルナリハ神奉

命調金鼎 八神ハ將神一年ノ命運
ヲ主ル金鼎ハ屠蘇ノ酒
ヲ調スル 一氣回春滿絳囊 一氣ハ
器ナリ 絳囊ハ屠蘇ヲ
入ル紅ノフ名ナリ 靈液夜流干

尺井 靈液ハ屠蘇ノ自然汁ナリ大
晦ノ夜中井ヘツリサケテラク
春風曉入九霞觴 九霞觴ハ
仙家杯ニ便

將鳳曆從頭數 日々持杯訪醉
鳳曆ハ春初ノ日々杯ヲ持テ明
郷屠蘇酒ヲ酌テ醉テタシム

朝拜 朝賀奏賀元日小職
奏瑞小朝拜臣天子を

拜 申さる事々々小朝拜
ハ略儀ありて殿上をうへと

公事 神武帝元年正月朔日柏
根源 原の宮ふ都と立位即ち道

臣の命等天瑞と奏せらるるよ
り起さるる日本記あり

哥 新集 たりとくやばうわけて
り糸の文のむもあらたまふ

朝賀 年中行事をこれにぞあつと
よらじとれ姑のあ代りあり

示朝拜 日とぎい私をいとや
ざりて枕を糸にまこととさふ

非松肥てふふおる 院拜礼 同
朝賀の非 喜清

仙洞にも行ひふ拾芥抄云く院
参の人々院の御所とて拜礼ある

事々々 元日節會 諸司の奏
會七曜御曆

元日節會 諸司の奏
會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

會七曜御曆

氷搦腹赤國栖奏、あまつらの事
と元日奏聞す、後川の奏聞
とだてのち紫宸殿に渡御ありて
百官小酒となす、（あ）百首歌合
の、（あ）神祇つらりる百首
の、（あ）和春のくみかたみさのり
の、よとよ代のあつとををく

諸司は奏、元日節會の廢、右
の事と天子に

奏、七曜御曆、木火土金水の
七曜の事と書するよつひの曆
ありあまを節會ふ奉ふ事と

氷の様、（あ）聖の御代に冬氷の
去筆の氷ととりて室に納めしと
節會のはとて奏聞とるる

其時氷の薄と厚とを是れと
石瓦のよんを奉ふ事と延喜

式よ水池風神の祭りして氷れさ
と年ハ大法秘法と修して行ふの
事ありし、仁徳天皇より

（あ）幸行事、今日ぞあつひの
よのよのよの池の氷れあつひと

詞、かきあまる代、冬とる年、春の如
非時、淳く厚く、腹赤の
あてや氷の様好道、腹赤、（あ）贊と云

鱒といふ魚とて、（あ）斑紫より
奉はと昔の節會を、（あ）供はける也

（あ）幸行事、（あ）子代にふみ、（あ）の
あつひをいふは、（あ）さるる、（あ）お秋をいふ

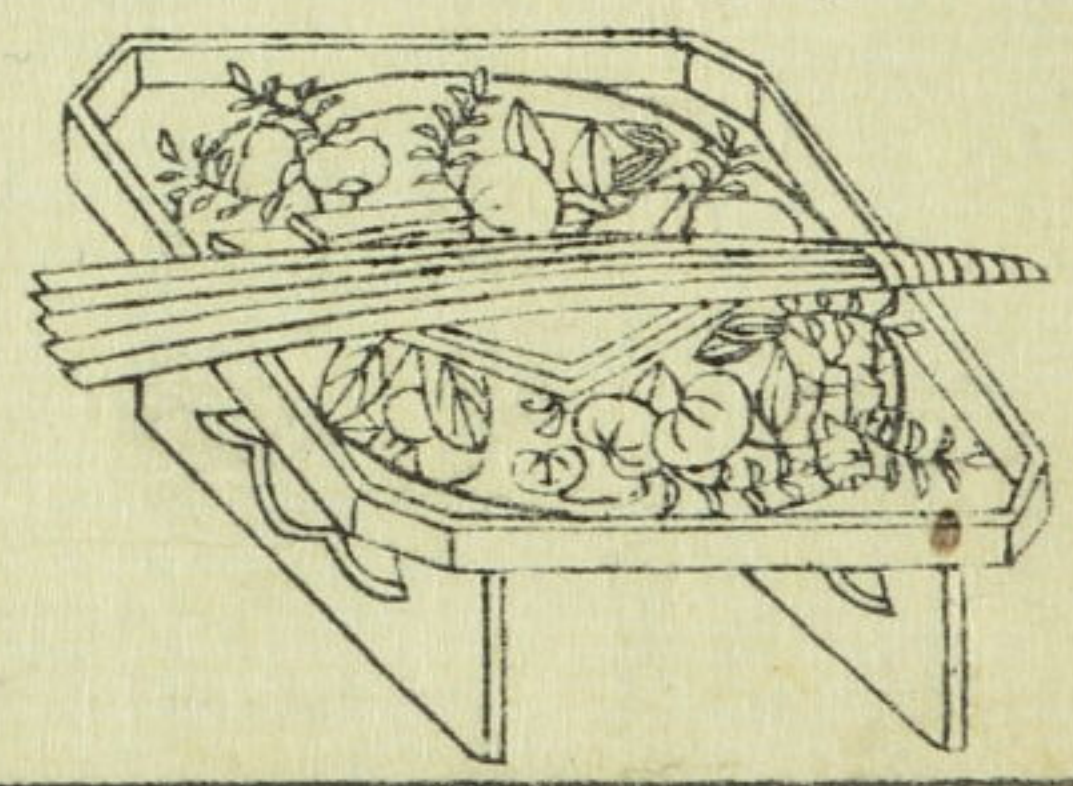
國栖奏、應神帝、芳野へ行
幸の時、芳野の興

國栖といふ夏の者、（あ）奉て、（あ）醴酒を
奉る、其後毎年奉内して、（あ）年魚やうの
りのと奉て、（あ）歌と諷ひし、（あ）今も
奉内する事、（あ）今國栖の奏とて、（あ）歌
うたひ、（あ）笛と吹ひ、（あ）芳野より奉る心、（あ）國栖

詞、芳野の君あふ、（あ）年魚献て、（あ）國栖の奏

齒固

えぐごめしめて
餅と鏡とて
向ふこい人の齒
と以て命しす
ゆ齒の字を
よつひともよむ
よそひをわさ
ひるようきり



高杯六本に折敷をさへ一の甚室
小大根搦とりはるり此餅は近江
の火さりの餅を専ら用るるり
まねよと哥小鏡山と寄てよむ
かり在家の鏡餅ふとどゆぐり
葉をささ侍るハ清少納言が枕
草紙まゆぐり葉の事とよみて
まごよひのづるえぐごめのは
てはくひたれるまご一名と親子草
といふよ一藏玉集みわり(おま)
あふまのやかゞ美のふとそたまは
かひてぞえゆる君が子とせハ

うまはけい言と一夫木子代まをれを
とるふとやん
あひておんと秘鏡のりひひる

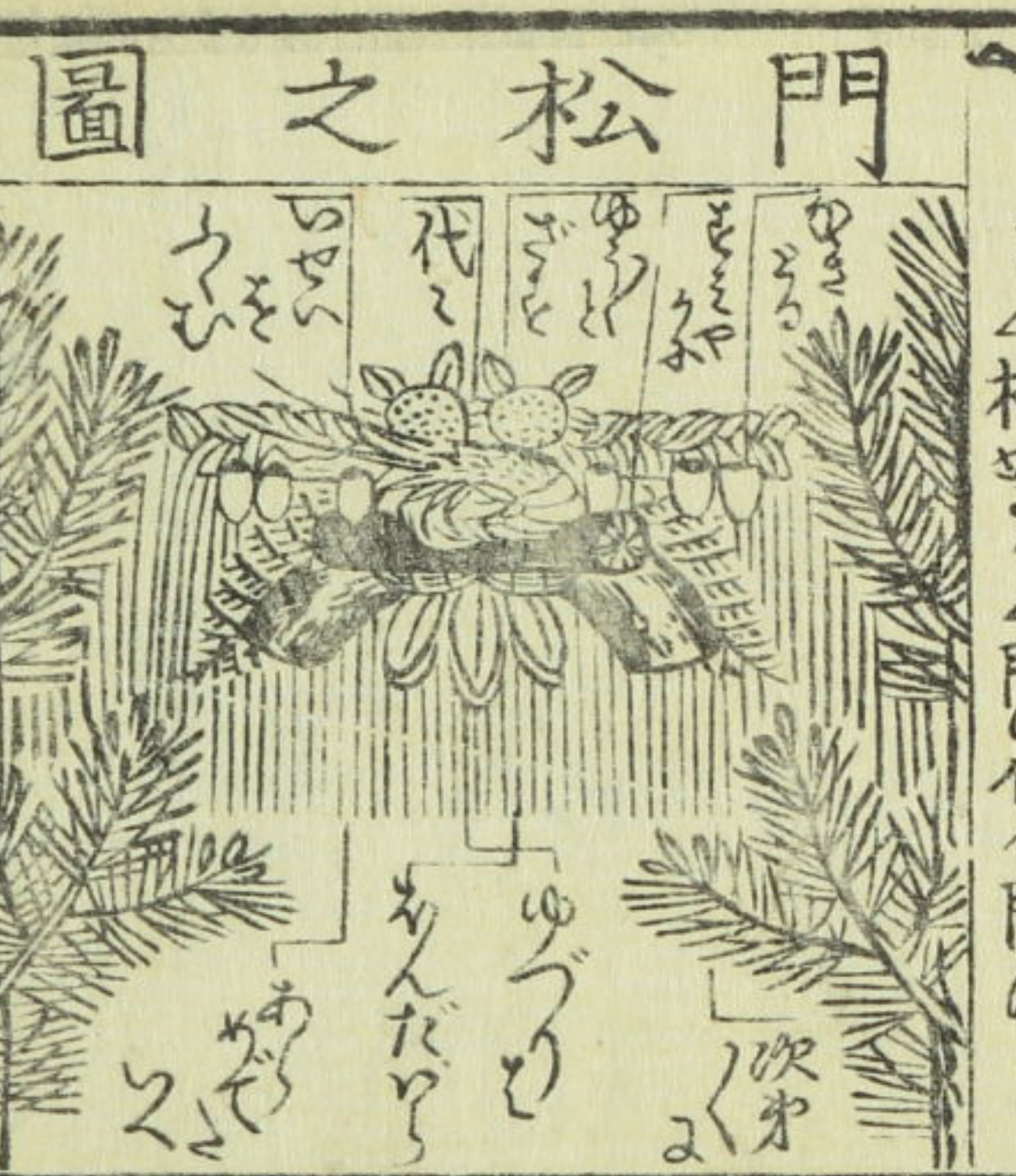
詞 ちひのぢえぢえ餅 齒乃木
ゆり葉うう白大根根ふぢえ草

あやこ草よつひのてひるやほくと
非 齒固やかしきさいら長袴裸虫

狂 びるて花のぢえさる餅ハ
あひるるさるりといふん保友

鏡餅 神小供る餅と鏡の如く丸
くまを故色く△りひひる云

門松 △立松△四角松△かきり竹
△松△り△門の竹△門松△り



門松之圖

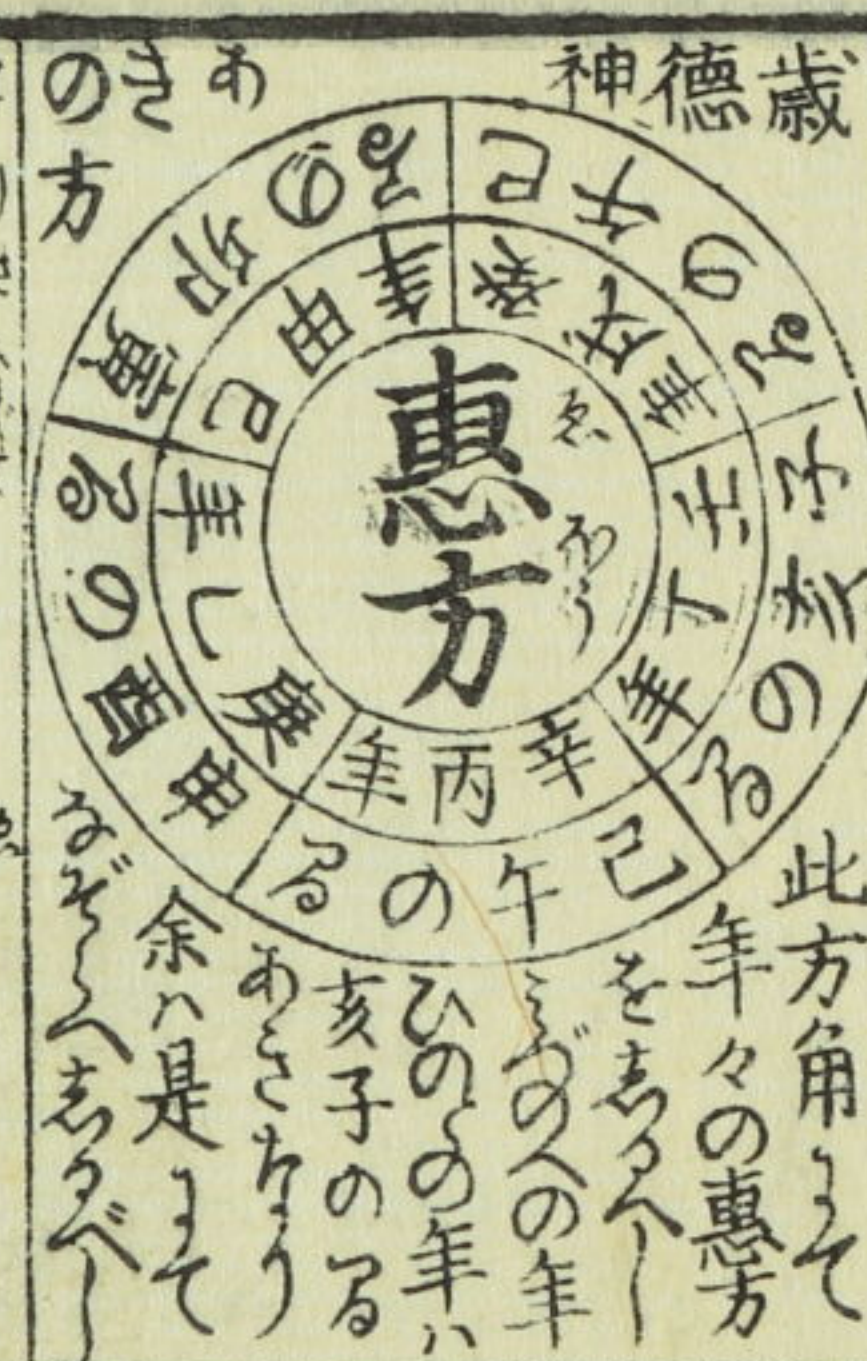
松千歳と契り竹の万代と契る
 のふれは年始の祝母用ゆるは
 一条禅閣の御説より又松千返
 まで百年一度花咲ても春也
 千年はより有とて年の始不用し
 新六帖云今松千返の松
 乃てかて松千返とてさやあつる
 詞花の初。民代於。民の戸。注
 連。百歳の松をさるを。年の
 始。年のくわむ。多て松。門松
 非二足りも久松や積く門の松麦林
 門松ふと物あるまの歳は良
 狂保つ守は松千返守松千返
 かる家にも正月の末川。一休和尚
 菓盒子 菓は小の餅
 物と指へ門松千返の添物
 饅炭 土中埋りても久し朽も
 本草云これを戸内小立ま
 邪悪と避るとあれ用るまへ
 非之月はとみう十のひび色 其用

注連饅 △饅縄△かざりワ
 ちうちうちうち 土佐日記

注連さし松のくく不浄とて心
 ちうの神社は常小志あるさひく
 ゆふふくさうの季ふあふびか
 ざん心と用ひま正月の季あり

非日本の雛形さしや志ある千河
 饅とてまの門田松千返 則重

大饅 △松。竹。炭。ま。縄。其外
 正月かざり物をいふる



此方角にて
 年々の恵方
 をあつる
 己の年の年
 ひの年の年
 亥子の年
 あつる
 余は是にて
 さぞあつる

婆利賽女の神と元方ふいりて
 のえりら雑煮など供へする
 元方黍 △元方棚 △徳神
 方角にて
 非子徳へ四方の歳や引出良徳

狂 東方より神の早く若節月
とくく神のけしんは枝

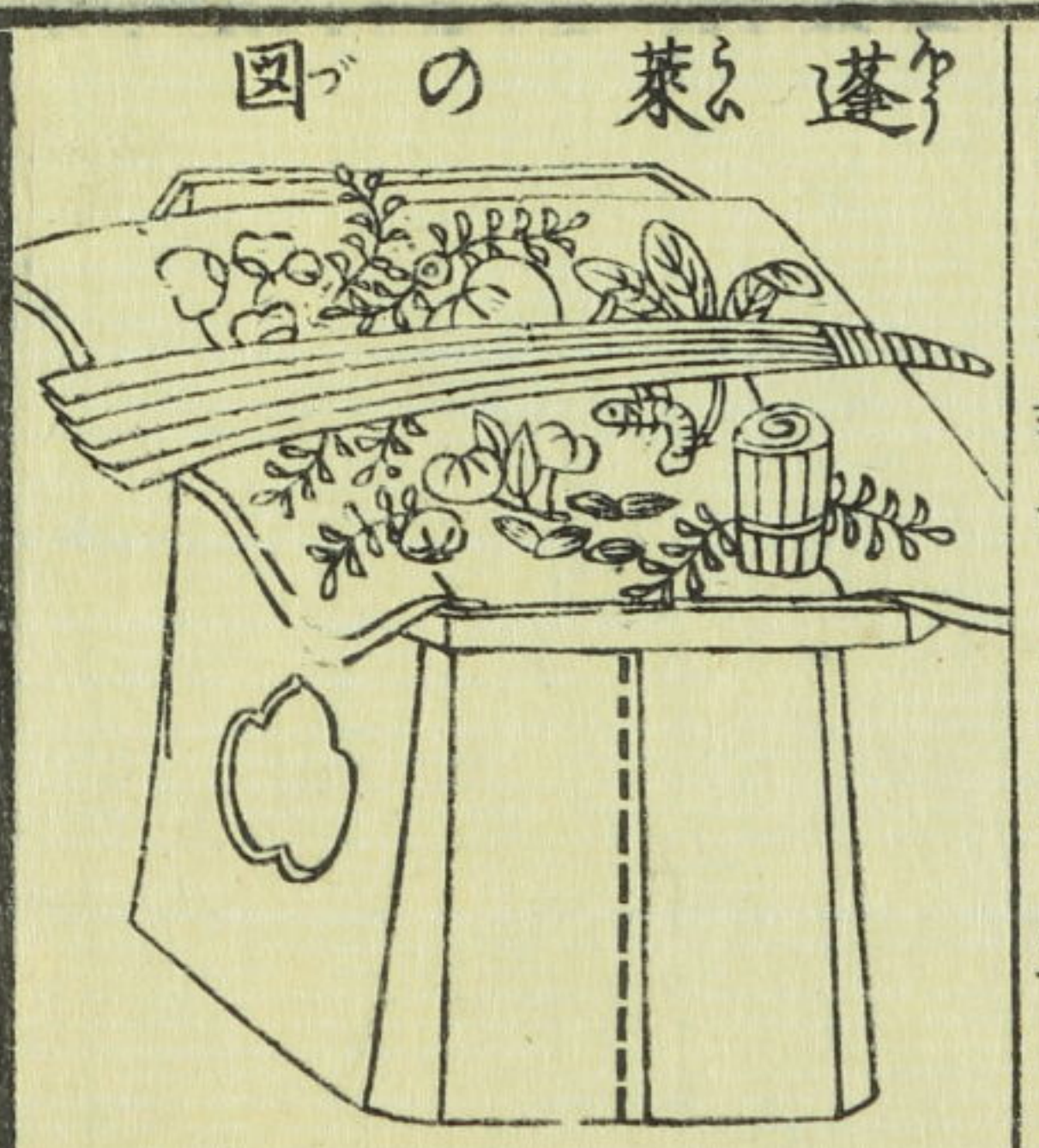
門の神棚 在家の妻戸の棚を
かきつけて祭る夜の土

器の灯をどうもま
え儀の事まり 蓬菜いそふ

蓬菜島の仙人の住處にて此處の
菓物と喰へ不老不死に至ると依て

年始は命遠くと祝して三方ふ種々
の物をつま重ね蓬菜と名づる祝ふ

○蓬菜やまのしよ海とやぬ 可友
○圖りて外の諸礼 家本式の通り



狂 仙家のいりりよのうまきまきり方
蓬菜庭む着けけの朧月山人

△蓬菜 三方の臺のあり
よる所と正面とひる

△橙 実をむまは七八年かち
代々つく故祝の物とい

△搗栗 搗の字と勝ふくへて万事
ふかちく心よていふ

△梅干 梅宝珠といふ
玉の心よといふ

△柑子 △ころかさ △昆布 乃一
右の品々かざる心とよむうかざる

△抽 △野老 △海老 △橘 △串柿
春ふて元日の季より 右の内委
由來のあり月の次ふりく

狂 みえりたかくところの名
をそとけしんはとわせいふ負折

食積 蓬菜の餅はふつ令如く目
出度の故蓬菜の積

○非 菓とのと食を長壽と得ん心
あつくと答積あはまぬ

狂 初まと初ま蓬菜さん
まのひるひるひる

海老野老

二品とも老の字を
あやうり用るる

殊に海老の腰のむらさきなるのみ
よりよのひ長く腰のむらさき

長命めで老人事と縁くし祝ふ
非いせ多の傍くもいし神の春親重

神馬藻

神功皇后異国と
あふと船中馬秣は

よつて海中の藻と取て馬の牧
神馬草と名づく名いより年徳

神の馬ふよとてこを焼く
又和訓小穂俵とらとて以て穂も

俵もめてとれ物をいふとて用
ゆらるるべし民俗をまうてあんと

祝儀表とる宿の表 栢 冬も緑
祝儀表とる宿の表 栢 冬も緑

変ら守其実赤さのあつゆへ
祝ひの物と守むし 諸見公始て

橘の姓と賜ふもこれを祝して
非栢はさよとまの傍りか安正

齒朶

裏白 齒よりいとも朶
山さかハえさともむらひ

長くそとこのつらといふ意して是
と用るる其上齒朶ハ雪霜ハも青

まど昔きりのさき 紅 親子草
ハ春の祝ふ用るる 紅 親子草

代々を譲り子孫長く繁栄の儀
とらうて橙 紅と並べ用るる代々あり

さくしハ其内ハ死する意味あり
死の字さくしハ人の死思ふへさき

ども常とありて人驚く事あり
唐ふかりるる斬有十畳の座敷

を建さるる折節天台の淨慈寺
ハ書記濟顛といふ僧の通るあり

せハ主人のよそ今日家後い
せば吉事の祝詞とあへて玉は

諱ふ濟顛とらあへて大音ふ云く
子有て親死し夫死して婦死せ

此家より千口の葬と出さると
とて走り出られり主人甚ど怒

つて新宅の祝詞とてのひ小却て死
を以て葬とて追ひて一捧と與
来きと僕み命す其中に老人有
て申(る)るこれ大言語なり必
怒(る)るべし子有て死せば子孫
を絶(つ)ト夫死して後婦死せんこれ
順道なりこの十畳の座敷よ
そ千人の葬と出さんといくを
く九年敷を歴さんいあまふ事
にあらざりは目出度語にあ
座(る)るはといふと死主人大小こ
らうて濟顛(に)凡僧(に)あはさば
事(と)ありまなく尊(び)けるや
うなま(と)りめて世間の物忌(ひ)
まるあ(と)狐(に)中(に)あ(る)べし

新撰六帖

有家

春(の)心(を)に(き)も(か)ら(ぬ)ゆ(つ)た(の)
ゆ(め)ふ(ら)た(と)も(君(が)と)死(し)て
能(く)ゆ(つ)り(ま)や(び)か(す)
家(の)大(り)き(り) 親(重)

雑煮 冬年の製置る餅は
種々の品を加て羹とて

喰(は)ら(ふ)其(の)品(を)家(々)の(嘉(例(に)あ
ア(と)大(小)異(り)そ(の)加(は)る(品(を)左(記
芋(い)頭(う)大(根(を)芋(じ)子(を)焼(豆(腐(を)か(ち)栗
昆(い)布(を)わ(り)い(煎(海(前(を)ま(る)め(う)き

能(く)耕(は)る(織(る)は(新(羹(は(之(多(山(宗(阿
狂(る)後(を)新(羹(と(る)ぬ(人(い(と(を
膝(の)と(は)る(考(と(ま(る)ん(と(ま(る)人

羹(の) 羹(は)雜(々)調(へ)煮(う)る(あ(つ
羹(祝(の) 羹(は)雜(々)調(へ)煮(う)る(あ(つ
の(心(を)云(ふ)即(ち)雜(煮(の)事(を)

祝(を)云(ふ) 結(昆)布(祝(を) 心(を)云(ふ)祝(を)
元(日(を)云(ふ) 結(昆)布(祝(を) 心(を)云(ふ)祝(を)

芋(い)頭(う) 万(事(の)司(頭(を)心(を)祝(を)
又(頭(と)い(ふ)字(は)大(学(頭(藏(を)

人(頭(を)く(く)わ(る)人(乃(各(名(を)
よ(ふ)元(日(は)祝(を)ま(る)る(を)

料(れ)の 兩(の)め(と)書(之)年(始(に)
遺(小(か)ま(り)け(の)名(を)

太著 △美著と云 おまきざらやうふ 年始の箸ハゆくと用ひる

開小豆 豆と水煮めて大根と 酢とといあて 雑煮

祝ふかてりりいといると云開く といといといのあてふりし

開牛房 豆と同一心開いて血 ぶりゆへ名つゝるさじ

加賀御州 大内にて餅の上み たく大根をいかり

⑤ 素 きた茶の中にも子さかみま やがてまのまきふまをえはる

鯨鮓 子孫繁昌とて祝する 数の子式三魚の焼物 光嘉

押鮎 鮎の異名年魚とて一押鮎 塩あめとて年始に用ひる事

江流第土 佐日記 見へり **俵海鼠** ちんごとも 生海鼠

さうさんと申ころと余多あり 能 たりとさる鯨のころの節 記枝

小殿原 △田作とも云。こぼれ いたりし事なり

海羸 海中で生きる海蜘蛛の身 元日の祝儀といふ

夏とも多く 出るもの **螺看** 能 ちりちり 文鱗

掛鯛 元日にかきだのうへ 干鯛兩尾とくけり

とろ鯛 元日かきだて喰ふ 國およそ其例一

能煎賣 昔元日かきだて 家内かき故

羊男 年越の豆とまきの正月の 儀式とほむを云ふ又其

年の十二支かきだるうらもゆかり 能 けりいしははかりしり男 弾流

大服 魚茶の名之服の字忌服 の服乃字と不吉ゆへ元

日小立一茶と大福とせして祝し 能 ちんごともさる鯨のころの節 記枝

狂春本れい色を青い別家にて
宿の大がくろかどみくか 入安

若水 △井華水△若水桶
△初手水△井開 乃事あり

公事小立春ふるむ水とひさ
連能小元朝くむ水をひさあり

連 △元朝くむ水とひさあり
△非あひひさの砂子冬門

福藁 △福藁敷くも庭か
とあま物と喰へん

庭竈 民家庭かきとあま新
しきまをひさしていり

福鍋 福多とい名のあたまか
て年始の祝詞あり

幸木幸籠 木の枝を折て夫
魚鳥菜菓とくひ

鬼打木 大賀玉の木とも
門松の影は木あり

毘沙門功德經 多門天
福の神

若戎 元朝小
賣あり

星佛 其年の属
星九曜星

懸想文 けんげんぶん

星佛 其年の属
星九曜星

懸想文 けんげんぶん

星佛 其年の属
星九曜星

懸想文 けんげんぶん

星佛 其年の属
星九曜星

懸想文 けんげんぶん

星佛 其年の属
星九曜星

懸想文 けんげんぶん

星佛 其年の属
星九曜星

懸想文といふ元日寅の刻
より町々を賣て通る赤と

袴立烏帽子とあつて是は
銭とあえはまの女はあんのめで

ついであつては皆祝して
洗米とあつては今とて

かへちまう文縁ぼきの早く
あつては祈る陰陽師乃

祝文よりまね元来の艶書のとて
非人の口を多くあつては

任のまうとつて後いとしくと
約の下まてけさうま貞徳

初雞 元朝のさう声なり 非一
着を耳よりんてさう望二

稻積 稲と稲はうを積いた
のまことほさうとめる心なり

元日の寝ると云二説三日とも云
非 移種や秋のま葉と花の春子周

稲あろ 稲つむと同心なり
さうとて故とある心多るに

初夢 大晦日夜より元日あ
つてはさうとてさう夢に

夫木 西行

年々金ね春来べうさうの春の
まうとてさうとてさう

非 和装や丁固が例と松さう少蝶
三物連歌 元日宗匠の家

そふ者或は弟子集り句とあ
第二句と句とといふ第二句と

脇といふ第三句と第三と
いふ三つあつてはさう三つ物

とつて是と板木あつて
市中と賣る事あり合と

は事なりといふとも宗匠
の家は例歳の式とあつて句

と作るあり 裏白連歌を
連歌の四枚の懐紙あり中

古あやまりを片面と書脱し
又一枚と添て五枚とあせり

のゆへに片面白紙なり
是と例としてかく名付たり

三物誹諧 右連歌 同ト又
裏白俳諧も有

元日異名註 正月朔日と
元日といふ

元といふ字を免とよむゆへ
とよめれ日といふ事に入元三

といふ事ハ年月日のちゆめ
といふこと△四始といふ年月日

時の始といふ事あり△履端と
いふ履いふむといふ字端ハは

とめといふ字義あり春ハ四時の
初ゆゆへを免とよむといふ

事にて元日と履端といふ△新
王乃年といふ改年といふ

をいへ万葉ハ荒玉の年也
あり玉といふ月のいたかた

内かれハ年のち免不祝
いふゆへといふあるべし

元日 歌連俳狂哥詩手紙
故事 いろくといふ

俊成

九をやむく危ふむくさの
そをさつりぬる子代の初なる

光俊

新撰六帖
今初まればうまをさめず衣

西行

家集 元日聞賞
志めりけてまてる高の松ふきそ

為家

夫木
年の内かまをさしとわく玉の

慈鎮

六百番哥合
百首やま成むうのさうがのさ

赤入

拾遺集
さのふをさひはれがまをさ

道通院

三朝
まかるとまはれたるよまの代

月見を免さのけし

昨夜ニハ似
カルトナリ

○蜀地寒猶

暖トク外地ノ中デ蜀ハ寒
氣余所ヨリ暖カナリ
正朝發早

梅ウメ都ハ巳ニ梅花発ケル
蜀ヨリハ又暖カナリ
偏驚万里

客カクコレヲ見テ蜀其外
外国ノ旅客又驚ク
已復一年

來キ春ノ早ク至ル今又一年
タチケルカトウタガフナリ
張説

元日詞

元日賜群臣栢葉ハシヨク唐ノ制ニ
元日椒栢

酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ
武平

歳時記ニアリ栢ハ仙菜ナリ
武平

綠葉迎春新ニイヨク色ヲニス
栢葉ノミドリモ春

寒椒歷歳寒冬ヲスキ来リテ
枝葉トモニ寒シ

願持栢葉壽仙菜タル栢葉ニ
壽キヲアヤカリタシ

長奉万年歡恩賜ノ栢葉ヲ捧
持シ長壽ヲ奉ル

奉和正日臨朝應詔天子朝廷ニ
臨シ玉ヲ御

製ノ詩ヲ和セヨトノ
詔命ニ應スルナリ

詩 元日詞

右ニ同

居間無賓客地間起只如常

住居スバ春ナリトテ賀シ来ル賓客
モナク只朝トク起キ出ルハ平生モカクノト

ホリ桃板隨人換桃符ノ製モ人ニ
ナリ

タコハ梅花隔年香年ノ内ヨリ發
キ白フナリ

春風回笑語雲氣ホウクワ十豊荒和

ハ人ノ笑物語ルニ似タリ祥
雲ハ富貴ノ上ニタナヒクシク 栢酒何

勞勸心平壽自長心中平和ニ
レテ正シケレ

ハ寿命自然ニ長クナラン仙菜ノ栢酒ナリト
テレイテスムル苦勞ハ無用ノナリトゾ

詩 新歲戲作 室鳩巢

莫笑腐儒生計貧儒者ハスギロ
ヒノ手ダテニ

貧シトアガケリヨシ
笑フヲ無用トシ 今朝富貴而迎

新中々貧賤ニハナシ林頭千卷人
今朝富貴足トシ

間染瓶裏一枝天下春牀ノ上ニ
ハ余多シ

書アリテ此上ノ染ナレ瓶ニイケン梅
ノ一枝ハ天下ノ春ヲ迎エ富貴至極トスヘシ

詩 壬午新年

同 龍州蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生雪ハ

ミレバ庭前ノ柳シゲリ絲ヲタルハ
葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシ

ナリ預知佳客到喜鵲兩三聲喜

鵲ハ声ノヨロコバンク啼ヲキケバカ子テ
年始ヲ賀シ来ル珍客アラシトヲ知

狀賀新年之文 片カハ尺牘

去陽之湯有地其體約中納伏

新 トニ鳳紀之慶

先 知其地涉家内之物

先 知 貴一眷

健 履 正一且

深 為 喜 盛 戸 中 無

定 公 任 太 年 始 涉 家 内 之 物

恙 渡 青 年 寄 賀 一 辭

新 兆 鳳 紀 之 慶 謹 獻 椒 花 之

頌 中 三 元 展 首 祚 中 陽 春 漸 次

至此 王 春 佳 慶 中 歲 序 告 新

貴 眷 有 屬 六 戚 健 履 正 旦

動 止 佳 祐 亦 逢 春 清 勝 入

新 年 深 為 喜 盛 不 堪 欣 躍

至 慶 至 喜 戶 中 無 恙 陋 巷 因

舊 寒 舍 守 常 私 第 幸 無 事

渡 青 年 斗 柄 東 建 轉 和 氣

偶 致 一 封 投 魯 封 致 手 啓

正月日令元日

正ノ年

壬午新年

龍州蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生

ミレバ庭前ノ柳シゲリ絲ヲタルハ

葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシ

⑤度捧半箋ヨスガシラ寄賀辞ヨスガシラ⑥不勝相オモシク

祝イハヒ⑦聊此由賀イハヒ⑧為以祝壽之タメニモシラス

證シメス任遲日イハヒ⑨他日期春遊タノヒニハシラ⑩須スベク

約ヨク尋芳日ハクシラ不勝九頌オモシク⑪臨楷快シテハシ

々タタ⑫呵硯皇恐カシヤウ⑬拜替首イハヒ⑭頌イハヒ

首ウタ⑮不備オモシク⑯誠恐誠惶マコトニオモシク⑰死罪シノヒ々

狀シテ新年之文返事イハヒ左漢文尺牘之シテハシ

為イハヒ二年南之法イハヒ祝詞イハヒ

早イハヒ辱オモシク誨イハヒ章イハヒ賀イハヒ

新イハヒ札示イハヒお見仕イハヒ以イハヒ作イハヒ

三朝イハヒ

於イハヒ此交イハヒ目イハヒお度イハヒトイハヒ納イハヒ公イハヒ之イハヒ儀イハヒ

万壽更イハヒ任命イハヒ記得イハヒ

長イハヒ法イハヒ家イハヒ内イハヒ志イハヒ出イハヒ願イハヒ之イハヒ儀イハヒ

貴府門庭各佳健イハヒ

廣涉踰歲イハヒ珍重イハヒ存イハヒ在イハヒ於イハヒ約イハヒ

多慶頻至將俟イハヒ

承イハヒ湯イハヒ付イハヒ人イハヒ不イハヒ修イハヒ修イハヒ之イハヒ

三春之行樂謹此伏候イハヒ

早辱イハヒ①速得賜書イハヒ②伏兼イハヒ申イハヒ

兼札示イハヒ③辱枉イハヒ④已蒙イハヒ誨章イハヒ

⑤教示イハヒ⑥求書イハヒ⑦珍牘イハヒ⑧家鴿イハヒ

三朝イハヒ⑨履端イハヒ⑩淑節イハヒ任命イハヒ⑪若イハヒ

諭イハヒ⑫蒙命イハヒ貴府イハヒ⑬仙縣イハヒ⑭錦里イハヒ

⑮邦鄉イハヒ⑯門庭イハヒ⑰邸第イハヒ⑱漢家イハヒ⑳黃堂イハヒ

或人の説イハヒ年始狀イハヒの結語イハヒ又期イハヒ永イハヒ

日之時イハヒ候イハヒあイハヒいイハヒの期イハヒ永陽イハヒ之時イハヒ候イハヒ

と世間イハヒ普通イハヒの書イハヒ来イハヒまイハヒよイハヒの期イハヒ永イハヒ

日候イハヒとイハヒなイハヒらイハヒうイハヒまイハヒてイハヒ濟イハヒしイハヒとイハヒなイハヒらイハヒうイハヒ之時イハヒ

の二字重言イハヒのイハヒまイハヒりイハヒまイハヒりイハヒのイハヒまイハヒりイハヒまイハヒりイハヒ

侍イハヒるとイハヒなイハヒらイハヒうイハヒもイハヒ有イハヒるイハヒこイハヒとイハヒりイハヒ

我新年自作詩哥と送る文

新屋吉地不可な住給ふ今納

甫歳上休兆 朝来

有枝始る舞當有珠布抄柄

鶯花競妍 偶

貞風一之徳毫仕以付以然涉

寄鄙詞 以投几下

月以宜教以原削而希以不之

拜 乞慈芥

甫歳上鳳曆中三春 吉兆

令辰上嘉令朝来今辰 發起

鶯花云黄鸝繞芳樹 梅鶯映朝暉

偶強于時即偶然 寄作賦

述鄙詞詞章一絶 鄙語野詩

投呈汚奉告几下 閣

下座右顧盼拜 恭

謹敢以慈芥潤色 斤

正請正不律不真草不宣不悉

状 同返事

涉 秋羽之玉委亦好ん

采雲辱嘉辞

仕以何の哉新嘗梅

鶯花乘

保長閑必幸文以仕以

春光遅々 寄即

身之佳唱も惠投也不存

事之詩章 興趣

感賞之由事不法納也

不減古人誓留之干

中作の事

案上アノ上ニアル

朵雲尺素尺書辱命無命

嘉辞壽儀祝詩壽章鶯花

云ナリキ花開鶯嬌影悠然黃鳥日

轉白梅風綻辰被投賜寄

即事即與對景任與衆感

興趣風調雅音不減古人不讓

暫留敢作家珍拜置千座若納萬重

右手紙ウチガミのこともウチガミを真字マコトジとついでありこの真字マコトジ漢文カンモンと次ツギに讀ヨクなり
如コト此コトある處トコロ漢文尺牘カンモンシツク乃内の文章ウチガミとわき出デ書替カガヒ又ハ異名イナナあり上中下のあつ敬ウヤ方同輩カタウハヒ目下の書ウチガミの多オホク併ヒラぶトあつ上中下ウチガミ不揃フソボる事コトふても一見合イツミして書ウチガミ魚イサ一

歳旦シヤウゼン 絶ツツ宣セン傳デン云クニ鶏ケイ之シ圖ズ也カ 故事コト 戸上トノニ貼テ符フヲシテ

分ワケスル百鬼ヒャクキオル其ノ上ニ葦アシノ索ヲカケル之ノ故ニ葦アシ索ソクトモ云フナリ

仙木センボク 桃符トウフ桃板トウバン桃梗トウコウ皆ナリ高タカシ

テコレヲ仙木ト云フ百鬼ヒャクキ恐コソル所ナリ是ヲ元日ニ立テ邪氣ジャキヲ

フセグナリ桃板ニ書カ法ホウ士シ民ミン并ニ儒者ニョウシャ僧家ソウカとて書カべき文モン皆

日本歳時記ニッポンシヤウジキ 五イ辛シン盤ハン 生菜シヤウサイ

ナドモ又菜盤トモ云フ松栢椒

花菜根ナダクネ芹セリ等ナリ生菜餅シヤウサイヒラナドヲ

盤ニ盛リテ相贈リシヨリ云

本草綱目ニ葱蒜シユンソ蓼リウ蒿コウ芥カイ是

ヲ盛セ饌ケンヲ五辛盤ゴシンハンと 如願ニコクワン イフ迎新イツシンノ儀ケイヲ取トルル之 商人清湖君ニ女ヲ乞ヒ得タリ商人欲ホシキモノ有アテ求モトムバ此女ナ

ニ、ヨラスス興へスト云フコナシ依
テ其名ヲ如願トヨフ常ニカク
如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソ
ク起キ出シテ商人怒リテ追打
シニ糞壤ノ中へニケリテ其跡
カタチナシ後人細繩ニ人形ヲカ
ケテ糞ノ中へナゲイレ令
如願ト云フヲナレケルト

椒酒カサヅク合椒觴ナド云フ椒ハ玉衡星ノ
精ナリ是ヲ服スル屠蘇酒ヲ

モチユルヒントウツルニヒトシ

神茶樹奇壘

東海ノ度朔山

ニ桃ノ樹アリ大キサ三千里東

北ニ二神アリ神荼鬱鬼トイフ

ユノ神百鬼ヲクマフナリコレニヨ

ツテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフセ

放生雀

邯鄲ヨリ

ノ摠トスルニヤ

歲朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ獻スカ

ザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

祈穀

漢ノ武帝ニ始ル天子五穀成熟事ヲ天ニ祈ル

粉荔枝

米ノ粉ヲモツテ荔枝ノカタチヲツクリ

食スル

折七松ユルヒチヤツ歲ノ始ニ松ノ枝ヲ折ル男ハセツ女ハニツ

茶トシテ是ヲ吞

鐘馗シヤウキ唐ノ明皇

ベント薫勤

ノ夢ニ小

鬼来リテ明皇ノ玉笛ヲヌスム

明皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ント

スルニ忽チ一人終南山ノ進士鐘

馗ト名乗リ以前ノ小鬼シトラ

ヘテ食ヒ殺シケルト御覽アリテ

明皇ノ御夢サメテ翌日御腦頓

ニ愈タリ是ヨリシテ後鐘馗カ

像ヲ画キ又入鐘馗ノ負ニナリ

テ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フト

ナリ此事唐ニモ久シク言傳フレ

ドモ附會ノ説ナリ秘笈ニ日本

歲時記ニ論ズ見ル正説ナリ

元日妙術

除年中病 去毒 山椒をほびき置

今朝丑の時より前赤小豆七粒と右の酒小て吞へ一年中病ふ

除邪氣

今日蒼木を焼い年中

の邪氣を除く或い煎湯とて

不老法

今日枸杞を

吞もよう

湯か入てゆあすれべ入て光

澤あじめ病む老ず **治臑氣** 日小便と以て臑氣を洗へる有

瘧疫と辟 麻の実七粒赤小豆

七粒井の中へるまへ病難と除

樹木

今日鷄鳴の比火ととり

てして樹木を見へるべし此時ハ

いまご垂みととるも腐らる

枝葉のあけまうらる所あり是

と取去るへし虫生ぜまるべし

又元 且五更の時早く芥と持て菓

れ木と吹く或い切る斯のどく

すれ其年菓実を結ふし多し

○鷄鳴のとき松明を火をどく 木の上下とてとせバ虫しやうせど

元日寺社

京

祇園削掛の神事 元朝寅の

用はとる路中浴外の家より大

火をうけよ奈詰の人おきく一説は天

海日の夜とく ○般舟院元三大師乃

画像開帳 ○六條道場天神自画

の像開帳 ○仁和寺北野兩所午王

加持 ○比叡山東塔の修正會但

元日より四日せきり 横川西塔八日せきり

大坂

天王寺講堂秘密供刻の室

藏の朝拜刻の太子堂の法

事舞楽刻の金堂の万石米西の六

時堂の重盃西の中刻 修正音楽西の中刻

初春之部

日の定まらば元日よりちり

旬の季乃りの此はさふ出ま

歳旦とちりあひのなり

若餅

三ヶ日の内又ハ初春のつ

きつるをいふ説ふ

小は餅若餅と云小は字忌故雑法

破魔弓 **破魔矢** 破魔を輪

とぬやとりしてまを射てたが
ひふ勝負をあそぶひんじり

弓のまひびるへい弓の不祥と
そふふの神道とい采物の

中に用也哥あり白虎通ふ云
天子まう弓を射て陽氣を

たよけ万物小遠とあり
羽子板 胡木の子といつと

まどろひなり秋のそめ蜻蛉
といふ虫の蚊を食ふのかりその

形をまひて板のせつと上とま
あつ時蜻蛉のこりと出たり

詞 羽子板の胡鬼板はさ
△を糸つく 右もまも羽子板のこと

毬打 △毬打

△ありぐ玉△ぬりぐ○毬打の厚さ
板と玉の如くあり是とありて

遊ぶ子供のもてあをび物と唐土
黄帝と云人虫尤といふとむい

外出尤の災疫神とありて人民とを
まや故虫を眼とありて年乃

初まぎちやうとありてりや○本朝
昔の年始ふ上つふとありて

故日本紀も出たり○万葉集も
玉きりといふまぎちやうは

△ざりぐと玉と打物と毬杖といふ
宝引 △福引とも云

△福引とも云 **宝引** △宝引

早春のふ物とありて云**年玉**
玉やまのめまといふ物 式之

書初 △試筆 **筆試** 初といひあり

元日小正月古例あり 王羲之の書
初月義書あり 王羲之

日往月來 元正首祚
正月のつぎひのひにきてしる月

太簇告辰 微陽始布
正月のつぎひのひにきてしる月

盤魚不宜 和神養素
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 書初 世間書みゆる

天筆和合 樂地福皆圓滿
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 長生殿裏 春秋富不老 門前日月遲
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 佳辰令月 歡無極 萬歲千秋樂未央
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 陽和入大慶 梅萼出枝條
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 梅自發南面 香猶到東簾
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 黃金自充夕 朱提忽納朝
正月のつぎひのひにきてしる月

詩 海内太平日 扶桑安靜時
正月のつぎひのひにきてしる月

書初のこゝ

新古今 要之

若く代の年の教と白おの
そめはすさごとく流りきくん

非古和やわがふ紙もゆり色友声
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

あつらふ我あふ系や手始梅路
あつらふ我あふ系や手始梅路

びくまきこれに毬打り
あへる物やうぶ

御降 元日よハニケ日 三ケ日
遠の間の雨

非日小日に彩と 正月吉音
かまや二日無勝 松の内 近と千

五日まの門ふらうあつ
文之江戸ハ七日ふらうあつ 松の内
志込内 小圃

春永 永見永陽と祝の詞 春ハ
日もあぐゆるマウあつ心とけ

非春永とつマウ 非 蔵開 非
洞のたぐり縄親重 非 蔵開 非

湯殿始 湯殿始 湯殿始 湯殿始
てつ涼戸 湯殿始 湯殿始 湯殿始

非之始 非之始 弓始 非之始
のさくたふあ井志 非之始 弓始 非之始

正月七日ハ禁中小御弓の奏あり
非之始 非之始 弓始 非之始

心先始 心先始 神代抄
日見始とあり〇又

飛馬始とつる説用ひが〇又
火水始是と正説とまハ深秘

非之代万々々々 馬葉初
はひめとつ先春可

非之代 非之代 着衣始 非之代
あつてつ白可考

衣服と着 衣服と着 祝ひ之三ケ日の
内ハ吉日と撰んで用ふ之説ハ

競始と書て舟も瓜かたり
のり初事とついづも舟葉初

各別よわまは前説と用ひ着
衣とつてつ用ふ 非 着

始老の轡をも 暦開
のりか玄音 暦開

春駒 春駒 駒と頭 春駒
禁中白馬節會ふる

非春駒や奇み 年禮
かゆらとつ死伯雨

年立 年立 星の礼 年立
年立マ年中の礼ハ星の礼

非 非 年立 非 星の礼 非

朝節外節親戚宴會とて
節振舞云ぬぐひ往来するを

新春の賀節と祝する尤令節
毎に祝ひ祝ふ事年始のころ限ら

どとせ正月二年の始めなる
由をりて格別節とて正月

の事と守祭りとて葵祭り花と
いへば櫻の事とするが如し

狂湯みぎり系より小鯛焼りのく
申ふもぬるる春のふりもい保友

節小袖 非海毛とら正月さ
ころ小そをりる正信

狂々あことんをぬぬ小袖
ころも書んせむは深衣 正信

椀飯 東鑑云く今日千葉之
介こんを沙汰すとあり

當月武家の節といふる
状節振舞招く文左ハ漢文左

松竹交々 詩兆
開曆 詩兆

緋のり沙 行盃
了 行盃

穀仕度人 乃為風
相共 舞

舞 舞 舞 舞
舞 舞 舞 舞

水祝 水子 去年新ふ娶に
祝ひ 男に水かゝる事と

これ水祿の比松永が煙と罷臣ふ
めあせよりとる 非

いも女房持 見 籟初
あいつい其角 籟初

篳篥 簫 彈初 琴 琵琶 三
尺八笛の類 味 織乃類

舞初 四辻家ふ祭初あり
正月十七日禁中

御舞初あり舞初ハ能秘ハ
あハ舞楽のそハをさる

御慶 年始の祝ハの言葉
さるハんよるこハハハ

履新慶 物ハさハハハハ
新ハさハハハハハハ

事ハさハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

淑氣 初春ハ立ハハハハハ
年始の言葉さる

歳旦句の祝 歳旦の字義ハ
ハハハハハハハハハハハ

つハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

義ハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

氣の物ハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

上子日

初子日 △子ハ日遊△小松引
△子ハ日松△初子ハハハ

の玉箒ハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

小松ハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

○今日泰山府君の祭リの日
ハハハハハハハハハハハ

新古今

俊成

ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハ

玉簪 たまごうさぎ わざのふ草ふ小松とどう
そへて家ととれをむつと

をふふ俊成卿の口傳小田舎母
かひといふこととどうふ初春子の目か

常は松をゆひうとてこういふとと
掃くとどう玉といひあつと詞をう

蚕を飼ふ家 いんをかうか 子日衣 こひついで
の祝儀をう のしげぎをう 子日衣 こひついで
服と名づく

△梅の花衣△鶯衣△柳の衣△のいろこ
△鶯袖 うぐいす ともうせの衣の袖をう

若菜 わかしほ △十代名州 じゅうだいなぢゅう
△磯若菜 いそわかしほ ともうせ

△初若菜。七種若菜。十二種の若
菜あり。七種のしゆつとさあつん

昔子の日ふつとどう中世う七日
誹詩 ひさい 別と七日の古ふとどう若

菜といふ夏七日の外五十日ふ さいといふなつしちじつの外ごじゅうにちふ
哥古今 貫之

去日け、若菜搦や白あめ
神ありとて人のゆえん

家集 いけあひ 好忠

夫木 雪中若菜 仲正
とつくのあまとつとてあつる果

夫木 独摘若菜 仲正
独子あまのさけけあつる果

御集 朝若菜 後京極摂政
於人々のためとてさけけあつる果

万葉 若菜 赤人
あつる若菜つとてさけけあつる果

夫木 山家若菜 兼盛
あつる若菜つとてさけけあつる果

千首 水辺若菜 同
あつる若菜つとてさけけあつる果

詞つとてさけけあつる果
あつる若菜つとてさけけあつる果

あつる若菜つとてさけけあつる果
あつる若菜つとてさけけあつる果

あつる若菜つとてさけけあつる果
あつる若菜つとてさけけあつる果

あつる若菜つとてさけけあつる果
あつる若菜つとてさけけあつる果

七種詞五字對句 同上

官樹千花發 キウキョウキョウキョウ 九重中禁啓 キウキョウキョウキョウ

階賞七葉新 キョウシヤク 七日早春還 ニチニツサハレニシノカハル

七種菜 シチュウサイ 延喜七年より始る上 ニシノカハル

臘司より禁中小奉るころり或ハ ニシノカハル

十二種供とるころり由公事根 ニシノカハル

冠見へり唐古とい七種の菜 ニシノカハル

羹と食してよろづの病とのぞく ニシノカハル

と荆楚歳時記より然共 ニシノカハル

何の草とい事と出守本邦の ニシノカハル

七種も諸説まちくなり寛平 ニシノカハル

年中の哥母へせり ニシノカハル

うそこづ ニシノカハル

そくし ニシノカハル

せり ニシノカハル

あさ ニシノカハル

△幣の水せり早芹の二種通用 ニシノカハル

とふ ニシノカハル

△東風菜と名づく ニシノカハル

哥書ハハ草といつり△ ニシノカハル

△本草の佛耳草なり ニシノカハル

△本草の繫纒なり俗 ニシノカハル

△北国といふ ニシノカハル

△詩經に詠す ニシノカハル

△京といふ ニシノカハル

△用 ニシノカハル

是若菜なり ニシノカハル

△深秘なり ニシノカハル

△既 ニシノカハル

△解 ニシノカハル

△土器 ニシノカハル

△單 ニシノカハル

△佛の座 ニシノカハル

△小児 ニシノカハル

△唐 ニシノカハル

△碎菜 ニシノカハル

△音 ニシノカハル

△延喜式 ニシノカハル

△若菜 ニシノカハル

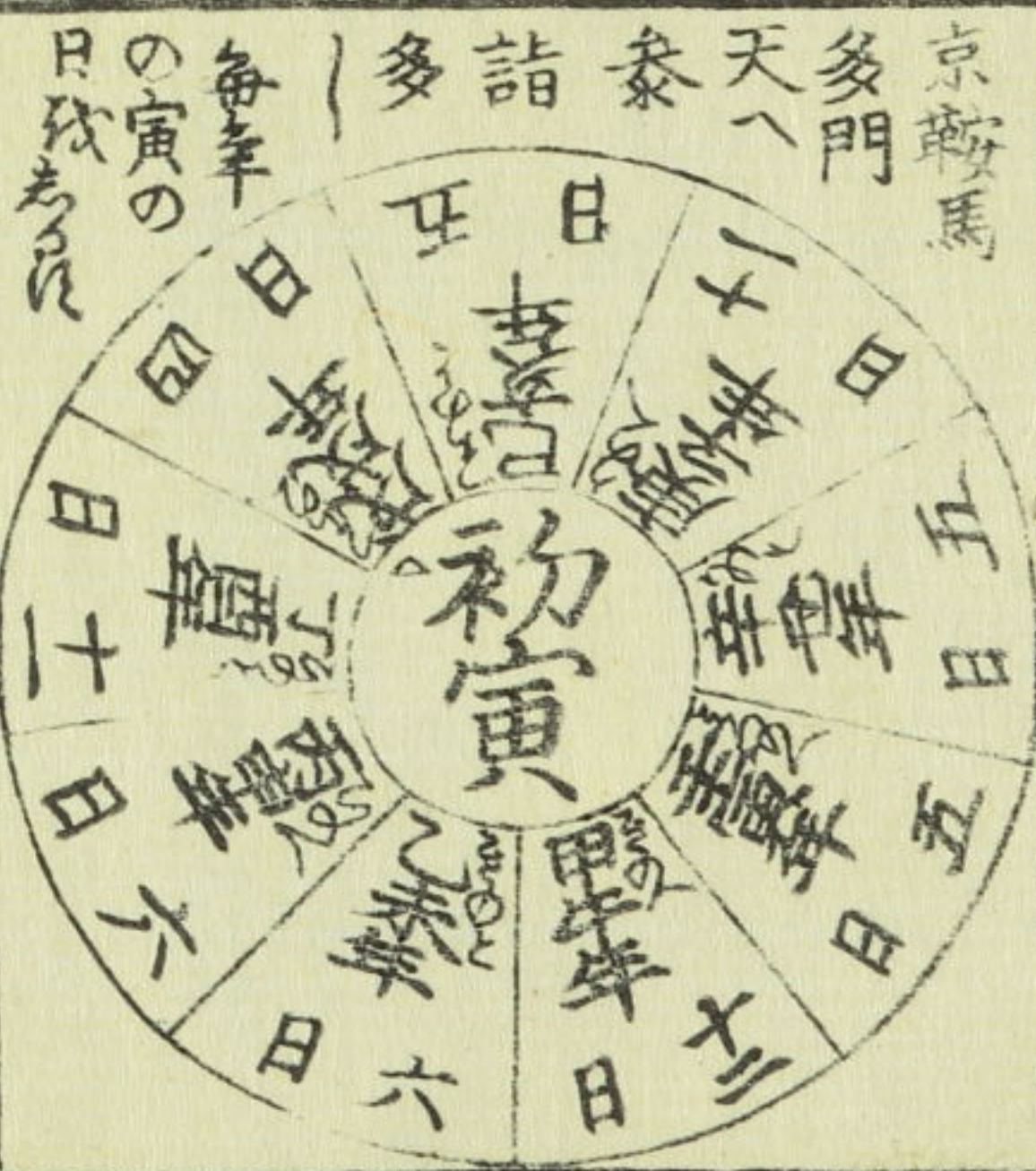
△七日 ニシノカハル

△用 ニシノカハル

△公事 ニシノカハル

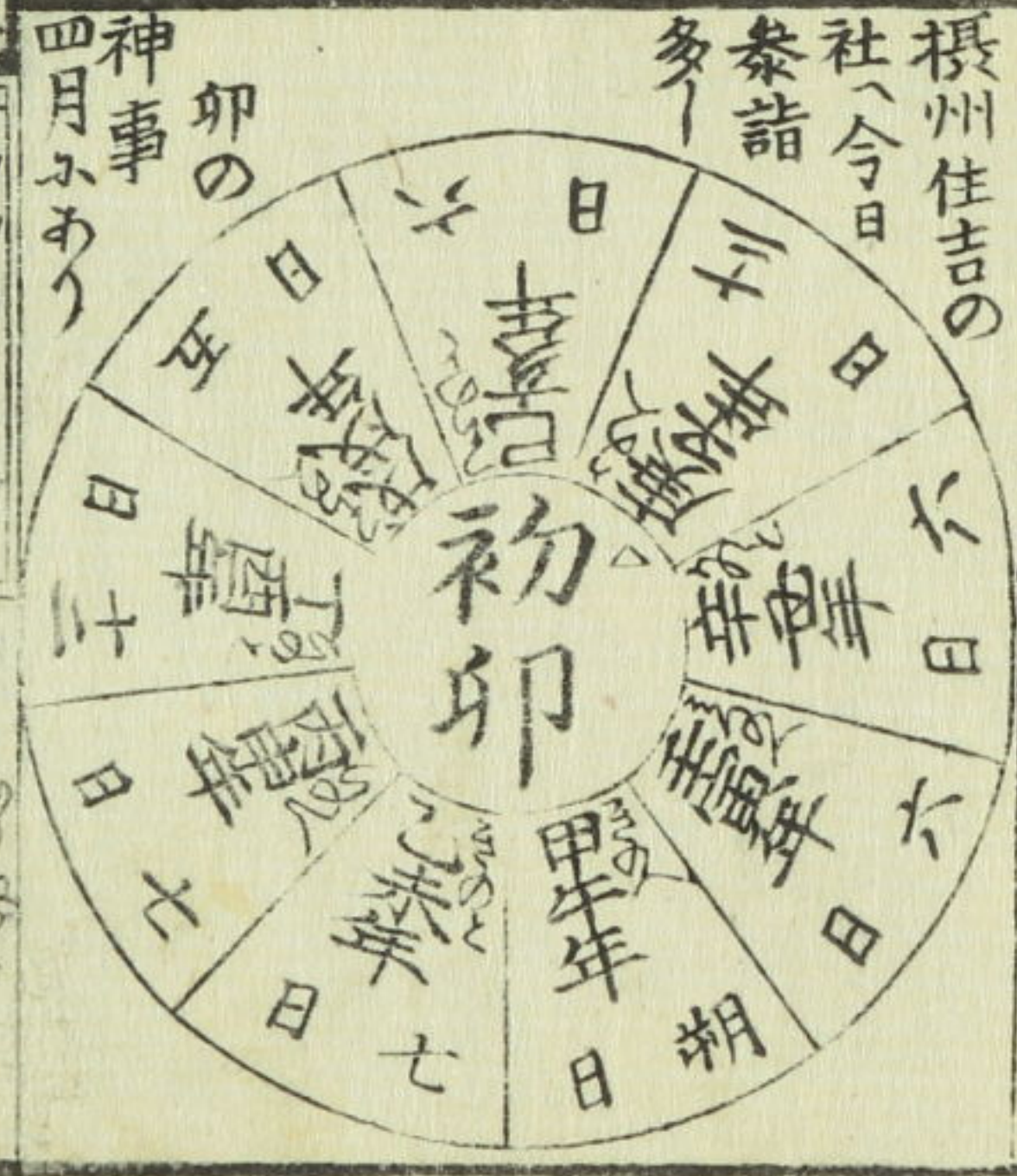
△七種の菜と食 ニシノカハル

病を除く見へる



△ふごある一...
御杖。卯槌。持統天皇三年
卯杖。卯日太皇尊...杖八十枝を奉

事日本記又出たり祝杖を献て邪氣と追打り源氏物語卯槌の事あり是れ系所より献す系そむらう同く邪氣と拂し物も同時小献する事るべし
後拾遺 秋代より年の始はる杖は祝ひそむらうまはれ人へ又君なる系卯杖と云ふはすいその春れわらする



上辰日
虫鼠を辟く今日虫鼠風のか
其外人家に害ある虫鼠のたふ再び来る事る

上未日

邪氣を除く 蘆火を持って井にうら
廊の中とてくせ 邪鬼皆走去る

祝詞 新禧休北喜事日漸
新社肇臻無勞益蔡

占ひじて日出度事を知 二 今日と
て有と云夏蔡ハ龜占く 日 狗目と云

二宮大饗食 二宮とい東宮中
宮の御事をり

公卿以下 二宮よ参り
て拜礼ありて饗ふく 公事 朝
根源

觀の行幸 是ハ天子幸始の事
おきうして上皇并小

母后の宮へ行幸る事あり公事
根源よ出朝觀の二字ハ礼記有

臨時客 摂政関白の家小大
臣以下の公卿を招

こで遊びのみく定まる公務小わ
らざれ臨時の客と申す源氏

物語ハハマンド客とあり御ゆふ
みど有てさいわくうへて樂器

を用ひざりて野曲の人も笏拍子
少てうへといつり 幸持事奇合

物たるの者此遊びの物そとぞ
梅をえうへふあつさきゆふ

詞神とつる縁ひきてある太夫入
はのそぞ 宿のあそびあそび

告朔 論語小朔と廣小告ると
そり毎月朔日百官の

行事とあるして天子の厭勝
入るかり 當月の政多とゆへ今日

或ハ四日さると行りたり
幸持事と云ふるのこゝをける

かゝふの物下は然をたむの女房
非 告朔の礼やゆふの年はま良久

摩那切始 高橋大隅の兩家
是と行ふ夜ふりて

商初也 買初賣初家より
三日四日とるどりも有

非 夢うりやのやが 京天狗酒
よみと種考考此君

宴 六原愛宕寺門前の強刺の
つらりて祇園會れと定む

堂中小太鼓ありこれさかき
と吹甚どさかしくさゆへ天狗さり

りりつゝふ○東西
本願寺松拍子 大坂 船王

船持舟王 近江 竹生鳥
の神とある 鳥つるさの神事

鳥へ正月二日 三 今日と猪日とす
ありて毎神事 日 不成就日○今日

江戸御諷初 たる薬 千瘡万
老松東北高砂 病膏と

銀器ふ入て天子小奉る每名指み
つけて御額并ふ御耳のうへに付

らつとを延 京 北野裏白の連
喜式ふ出たり 歌○比叡山横

川西塔元 大坂 天満石
三大師會 不動衆

四 今日と羊日とふ○開基の福
日 節といふ今日と羊の基と開福

沸 今日三日供ふる餅と菜等が
りて喰ふ福沸といふ祝詞入

餅の異名と福生果といふ故りの粥
と福沸といふ也○又七日喰餅菜の如

も福沸と云ふ又香 菘と湯と物と煮ると
相々くさるゝいふ名と縁は木

かえ開 神前吳前かき其外家
ねとととさかお元日より

餅と供ふる鏡餅といふ今日七月
十五日等かきやて喰ふ開といふ

夏よりさるといふ忌詞故にひといふ
開今期向ふ東ののららる光廣

白髪と香 今日 京 飛鳥井家
白髪と香の香を 京の蹴鞠始

難波冷泉の 大坂 天王寺芹田
両家皆同日 坊の修正會

五 今日と午日と子花とろの榮地
ある人の農人禮と勤るなり

天氣 雨れは五穀ふ 叙位 五日
は蚕ふあり 六日

諸臣の年鴈を奏し次 **木造始**

弟小位を叙する事あり **禁裏の** **萬歳** 五日禁裏來行事へ **萬歳** 千壽万歳

とつふかり一條院の御宇大江の定基三河守に任じ其民よきへて佛教傳來の因縁とのぞき舞しむるをとどめとせり

非 初まのされと名の方春ホ **觀**

狂 万歳は狂ひと云ふ猿引は

八百八十四文 **猿引** 是も今日

やほり 不白 **廻** 禁中來

おへ **非** 猿引や猿の **京** 東福寺

引らぬ傍様 歌石 **五百羅**

漢の画 **大坂** 天王寺太子堂

像掛る **生身供** 十四日

六 今日と **六百年越** 七日八日

日馬日と **今日と** 浅草寺

京 高其寺 **江戸** 修正會

方丈藏法

近江 山王三宮七 此日 岳小登り

神事能 日遠く四方と美

陰陽の氣を鎮ふ事を傳て年中

の煩惱と除くの術也と萬華谷

といふ本小出たり李亮といふの詩

命駕 外西山高目眺原晴と

作さるも○七月八日と云ふ又靈辰

此事なり といふ人万物の灵也

といふよつて靈辰と名つく○三

や圖會小曆と違ひ今日と往

亡日と寺出行を忌まざるも頼朝

出陣と諸人往亡日とる所りて

とくむとどむれおれてくま亡ふえ

とくつて軍利ありとつとかり

天氣 風雨やま **白馬節** 災ひあり

會 七日 白馬と見れば氣と

拂やといつて禁中して七日白

馬北足引々々馬八陽の獸青と春

の色あり故に春の始と御覽ある

て女王小祿を賜ふ公事の時女王
祿の女は字とよほと王祿と計ふ

京空也堂鉢 摂津△箕の鉢
昨七日より 薬師 月毎
叅詣多し 八日と十二

日と縁日とく諸方
くも叅詣あはし

九日 又ハ吉日
吉書奏と多くびて行

る大臣叅りて諸国の守釣と給人
て不勸の倉と開くべき由と奏す

る之俗ふりり 摂津西宮民家今日
びりき是る

十 天気 月ハ曇あれハ春中早と
併曇早くきわれハ早せと

〇午の三刻風とほと
ぐる風さけまハ雨なる 帳釘

帳書今日明日とりて
帳祝賣人の家ふいへて年

中ハ賣物買物を記し置く帳
面ととらりり

とハ夷祭 千日夷も
小判も春はを 狂もの勢も

ゆく 常陸帯ハ神事
貞柳 鹿島明神の祭ハ日女の懸想人ハ

帯ハりきあちて神前小置ハ其
内ハりて見る帯を見て女のけ

帯のやうにふりてするら其とび
けの男と親く事ありと

無名抄ハ見へり 常
あはぬ風も神が海 東怒

十二不成 鬼宿大音と事ハ正月の
日就日 始吉の字上ハ今日と云え

御具足鏡 具足鏡開 元日ハ具
足ふそと

足ふそと

足ふそと

足ふそと

足ふそと

足ふそと

煮とあて喰ふし。○江戸御殿中并
小諸大名の屋形も同断かりとの

○北日之大猷院殿君の御月忌
多ゆ兼應壬辰の年より今日

○**縣召** 非 緋威の海
をもちて神のま木冠

除目 今日より十日まで三日行
りてアガタとい郡国と申

○諸国の受領を召て官禄と玉
りて御殿の廣庇ふて行する

○**事始** 今日何事いす
仕初る帳の表書

○**京** 柳原の神小神酒と供す
今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

登より晴きハ月中雨。○月小むさわ
れハ飛虫の類多く死と。○今日
一日ふりあれハ百菓とく実の

今日と十六日と雨ふまば年中雨多
○**解齊ハ御粥** 日の御座の大床
かて臺盤一肘と

立て供す御粥赤さかりけ小和
布の御汁物をそとより三口食ふて

御箸と **薬師** 毎月今日と會
日と参詣多

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

○**天氣** 今日日曇り
五月中南多

○**節と** 今日と廿一日毎月なり

結鎮も云弓矢の大札
神后皇后三韓退治の時始
まる天下太平の御祈禱なり

○**南都** 奥比
心経會

○**削花** けり
今日と俗よりんうと

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

○**踏歌** 殿上地下の輩
殿上地下の輩

どめらて催馬楽とてい舞ひ
 かざる事あり天元六年より始り
 うら小ても唐の世小長安母踏歌
 せしめ事潜確類書小出あり
 我朝よ持統帝の時漢人來朝
 して踏哥と奏と此時萬春樂と
 舞ふ今の万歳はこの余風なり
 これを男踏哥といふ十四日の夜より
 女踏哥ハ十六日の夜よりあり
 其のときよれありといひ又踏哥
 の節會ともいひうひう京中男
 女の声うはりく能うさうさ者
 と名ははぶて幸始の祝詞とて
 くらて舞を舞せるとせしむ得じ
 ぬいふ或時の和哥さうさひ又詩
 さうさふぬめしもあり源氏物語
 小竹川さうさふく出あり高巾
 子小綿の花を作る是をさうさの
 ことといふ又ありさうさ朝士の文
 とよくするものをして踏哥声調

をさうさめらると事文類聚小有
 るがしそまは十五日の夜と云云

年中行事哥合

貞世

そのまの声さるとるをみふ
 うさのさうさめら月夜み
 能ひせぬを祢代さし踏言宴其角

踏歌詞

唐張説

花萼樓前雨露新長安城裏太

平人今夜イロくノツクリモノアリ都

龍街火樹千燈艷雞踏蓮花萬

樹春梅蓮ナトノ造リ花ノ燈笠電

二造ルニキハシキ見物ナルグ

御衣月會内論議

南殿小て
御奇會

の結願を行ひ問者講師ふと
 御前小て論議とれば内論議と

肯灰アハレナルハ材木ナレドモ心ニ時

節到來寒焰發萬人頭上一聲セツク多クライカクハハシバシトヤカレヌア

雷時來リテ火ニカ、リテ松竹ノ鳴ル音雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒビク

御薪百官悉ク薪と奉りて宮内省内省亦亦おさおさええくくああくくとと々

民のけちも民のけちも振振ひひみみららりり家尹家尹

赤小豆粥紅調粥△粥桂とソ小豆祝祝

清水納言枕草紙清水納言枕草紙小十五日小十五日いりいりか

ゆのせくまゆのせくまるる書書もも此此事事かかり

粥粥木木十五十五日日二二杖杖のの如如きき物物とと云云々

きたとむきたとむわわれれとと桃桃及及麻麻此此杖杖とと云云々

れる女房れる女房のの男男子子をを生生ととつつく

平岡の御粥河内国恩知平岡の神前神前とと粥粥をを煮煮

田島田島の吉山とのの吉吉山山とと上元上元今日今日とといいふふ夜夜をを

占占ふふ粥粥白白共共云云△元宵△元夜と云

七月十五日と中元と十月十五日と

下元と久久のの唐唐のの今今夕夕燈籠燈籠と

多々多々ととりり甚甚ああららりりきき事事々

本朝中元の夜はと是と花燈花燈々々云

詩 上元詞

大樹銀花大樹銀花合星橋鐵鎖開合星橋鐵鎖開

燈燈ノノカカササリリ善善盡盡シシ美美盡盡レレ種種

種ノ花種ノ花ヲヲカカザザリリツツククリリモモノノアアルルツツ

暗塵暗塵隨隨馬馬去去明月明月逐逐人人來來見見物物

人往來人往來々々ハハスス賑賑ハハシシ遊遊妓妓皆皆穠穠李李

行歌行歌盡盡落落梅梅衣衣服服皆皆美美廉廉ナルナルガ

ミミチチクク落落梅梅ノノ曲曲ヲヲウウケケニニタタキキアアルルククナナリリ金吾金吾不不禁禁夜夜

王漏王漏莫莫相相催催金吾金吾ハハ御御門門ヲヲ守守ルル官

人ノ出人ノ出入入ヲヲ禁禁ススルルナナシシ玉漏玉漏ハハ禁禁中中ノ

水水土土圭圭ナナリリ今今宵宵ハハ土土圭圭ヲヲヤヤメメヨヨカカシシ

上元故事 唐主唐主ハハ今今夜夜元宵元宵元夜元夜ナド、云テ燈ヲ点シ賑ハシキト本朝ノ中元ニ夜ノ如シ

唐ノ世ニ韓國夫人百枝燈樹ヲ燃セシ故事ト云フ

唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス街衢ノ

燈火白昼ノ如シ士女一人モ夜行セスト云フナク車馬路ニ塞カルト

靈異小説 傳相 今日唐ノ世ハ二出タリ 貴戚黄柑ヲ

贈ルコトアリコレヲ虹橋ヲ架 怪 傳相ト云フ

録ニ云ク唐ノ開元ノコト正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何

レノ所カ極メテ麗シカラント仙師答ヘテ廣陵ニ踰ルコトアラント帝

タ何シノ術有テコレヲ見シヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アラル

ヤガテ大真并ニ高力士黄香綽樂官数人ヲ從ヘ歩シテ橋ヲワ

タリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

花燈 唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモシ舍利ヲ辨ス也

○至道元年燈夕太宗御樓ニ是ヲ花燈トシテ會利ハシテ橋ノ花杜吾

京 加茂左義長並ニ神事○差我親迦開帳ノ八幡厄神祭 十五日

伊勢 △獅子頭神事 山田度會郡ノ獅子頭ニ神体トシ十四日ヨリ十六

駿河 △御穂祭 三保大明神是ニ三穂津媛命ニ祭ル十四日ヨリ十六

養生 今日大酒といキ一ハ又夫婦の交すハ

天氣 今日西南の風と入門風といふ豊年のもよみ

東南の風もより西北の風は早とつらさるる晴天も早

女踏歌 十四日男踏歌の如く京中は男女

声よく哥とてふを絶えて羊始の祝詞をつらあるい

哥とてうらひ詩をうらひ
免ふたけりも有しとる
走

百病 既小本篇博物笥
に見へり ○西京雜

記小云く執金吾の宮中の者の
夜行と禁する官之今日勅して
前後各一日間三日の禁とゆるる
これを放夜とよとちと見る

時ハ唐土ふも此事有とる
非菽ハそれいふをたれが
野

狂菽ハ塞は月をれやう
てら二とあり

京 永觀堂大般
若轉讀 ○

頼朝卿の世ふ始る ○加茂神事
○北山石不動參 ○千本焰魔堂

參 ○大原野春日の宮 ○
差我焰魔堂六斎念佛 江戸

焰參 ○増上寺山門開
釈迦十六羅漢を拜せし 大

坂 天王寺射場の弓とめ ○同
所金堂大般若轉讀 ○住吉

甘菜の御供神 明神々詠
殿御精進供あり 外々ハ魚所供あり

いもの酒うみれおとまとも
口は社をれせとまとも 十六百

櫻 伊豫の国道後の左の方山
越村といふ所の了恩寺山ふ有

山ふ登まべ左の方林の中に
て毎年正月十六日小花咲くゆへ

名つくひり此山は花と愛する翁
あり実うえのさうあると老後ふ

及んで春咲く花も心せよ吾よ
ひ八旬ふあまれば此春花咲頃ふも

逢ひがうとしからねば花とら
ち咲より時是正月十六日あり

それよりして年毎ふ正月
十六日小花さくとあり

天気 今日と秋萩の日といふ
晴天多しハ秋ふ至て五穀

七十日

豊作也大雨あり秋洪水あり
曇るに秋作不宜昼を晴るに管は

京 禁裡伶人の舞御覽并に
鶴庵丁大隅高橋隔年小

大坂 天王寺東照官御
法楽○同所金堂

江户 上野御茶詣
御盤官御弓 御糞東して

養生 今日参る
賭 事といふ

弓 天子弓場殿にて弓を射
あふる其肩より方ふ罰

酒と賜ひ勝る方ふの舞樂と
奏才大く近衛の官領るれ事

とく大将射手小饗と賜ひ
ととかりあふる

年中行事奇合 一人あは
棒弓射子の可成りはま

かたりあふるそ氣文ことふ
美春そ棒はまかりて

地姫の心ふまるとそすり頭仲
能きひ射る燃弓や二人張友静

京 禁裡の左義長○山崎室寺
鬼○壬生六社大明神祭○

大坂 天王寺太子堂踏哥節會
○新清水寺觀音供

不成 八幡厄神祭 今日まで
九日 参詣蘇民將來札守りと

京 天王そまが情を得ぬい汝子孫永く
災難をまぬくといふいふへるゆへ

△吉田社清祓 厄神とく人事あり神
樂園二十六本の御をい

法然上人御忌 今日九五日迄
四ヶの本寺にて執行せしむ

能くの世を乃どろあはれは林其角
権震む法そり一筆从ふ松竹

光秋収日 晴天さへ百菓
日といふ 熟す

女鏡臺祝 皆ふ祝ふ事甘と初慶
と字音同じき故世祝ふと

女鏡臺祝 皆ふ祝ふ事甘と初慶
と字音同じき故世祝ふと

習字の女人の鏡臺小供
餅と今日いそぎ喰ふ交り 今日

骨正月といふ京大坂杯も今日
塩魚の骨は大豆酒のゆと煮喰ふ

廿日團子 今日だんご喰ふゆへ名
づくの唐土江東といふ取

今日紅の糸はく剪餅をつるさ
屋根の上はたさてこれと天穿と
名はくさるあり。拾遺記に見えそ
り廿日だんご喰ふゆへ是

江戶 諸大名將衣束
小て上野参詣

下交 嚴島祭 安藝の國の市杵嶋の神
云地景の美なる故名くこ

北 天氣 風雨とまると日之風あひ
雨ち若晴といふ異日風雨

内宴 仁寿殿とて行りる文人
題を賜り詩と作し御
前とて講ぶるふとて(お)年行事哥合

子子旅伴の息れそのゆへ

花をみわたの 京 伊勢祭主柳原
ちのあふらん の柳小御酒と

供せらるる○本国 高輪毘沙
寺。日朗法會 門堂富突

二廿 京 太泰聖徳堂法事○大原野
春日社祭(能) 西園灰形祭

大坂 天王寺太子堂 三廿 京

東山善正寺 四廿 京 川島祭の
秋迎の開帳 愛宕参次

江戸 増上寺上坐法問 諸大名
参詣○愛宕山参り

五廿 養生 今日房 天氣 月小量有
事とて 樹小虫多

京 北野法祭 御忌 法然上人
連哥毎月 御忌日へ
知恩院北

明寺黒谷智因寺 百五返
淨花寺四の奉持は於て
法事あり十九日(う)合
日までよてけら(う)ん
初天神

京北野江島湯嶋 西田下津
大坂天満 参詣多 六廿 京 林神事能

不成 泉涌寺舎利會

就日 京 西の田牛ヶ瀬祭

江戸 目黒不動 大坂 北野石

初不動 今日縁日ゆへ諸國不動参詣多し

晦日 天氣 今日風雨あり清水寺の連歌

白髪と除く 今日井華水と少く

月令 此部は日の定まらざる正月の事とのれ初春の元日次ふ出と

外記政始 尤吉日とあるふ外記恒例臨時

の政事と執行ふ官あるは正月の當年の政と行ひ始る義あり

店卸 惟祝いと同一類(非)一奉のんささめや柳の風琴

傀儡師 傀儡のつとよひ驛舎の留女の遊女

とうひたる松とつとよ人形とまりて其らつつの留女の身ありとるわう又でこころも西の宮路も

詞 ちこまへい 山摘つとよ 去むの味

非箱ふ糸てませぬ橋や傀儡師波上

夷廻 傀儡師の類して初春小夷の姿とまへ目出度とをま

初芝居 昔ハ芝の上ふて見物しう故志むわく名づく

三節 正月元日 七日 十五日 右と三節とつとあり

歳旦開 宗匠家ハ正月吉日とあつと門人たり

よみきつと歳旦の句をあつめ席とひつて句の次第と定む

正五九月説 本邦専此三月慶賀の事とせ

雪の去りけり春の来りけり
いと明き春の来りけり

柏玉 初春海 道徳院

波風孤き風がらめて四つ海の
我もく物なると春やたつらん

詞 春の来りけりけりけりけり
日影ひ長閑 春の来りけり

春の来りけりけりけりけり
星の来りけりけりけりけり

煙民の来りけりけりけり
暁の来りけりけりけりけり

朝天子の来りけりけりけり
年三の来りけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
山雪の来りけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

春の来りけりけりけりけり
風の来りけりけりけりけり

りろ人。袖のつらねて行く。人の心
此のころ。佐徳進。棹燈の光。夜
おきて。淡ゆらふ春の夜。夕
都。この春。九重は雲。花の都の
袖。垣かき。ねの若りえ。袖。雪
まに。見ゆ。この久。この天の雲。天
の。雲。井。この春の。改。の。う
ら。と。も。初。春。

粗 山依のおひき。とめと。夕。雨。の
門。出。も。た。け。け。の。う。の。う。信。徳

○初春早春の題。立春の哥よ
み。さ。る。か。ら。や。ゆ。れ。と。か。も。立。春。の

題。初春の哥。詠。な。り。守。立。春
と。い。い。春。の。節。一。日。は。か。さ。る。く

早春 さきう 万葉 ばんやふ
お。さ。く。ら。う。見。る。柳

雪の。と。め。て。た。く。く。あ。い。さ。れ
拾玉 雪中早春 慈鎮

附。あ。れ。が。く。ま。ま。ま。の。雪。こ。も
常。の。う。み。を。た。ふ。ふ。ふ。ん

艸庵 早春氷 頌阿

山川の。あ。け。き。波。さ。ら。く。ま
ま。ま。ま。ま。ま。り。あ。さ。は。ら。う。ふ

夫木 曉神祇 家隆
祇。山。の。ひ。月。は。ま。か。さ。え。て
と。う。れ。ら。う。春。の。こ。ひ。く。ん

同 名所早春 如願
相。坂。や。く。見。も。あ。い。ね。枝。た。葉。に
ま。ま。あ。さ。ら。う。の。あ。の。く。そ。う

宝治哥合 早春霞 信実
朝。霧。を。も。ま。ま。あ。い。玉。の
こ。は。い。ま。う。く。ま。の。ひ。ね。を。ま。れ

詞 庭ふらり。淡み。う。若。を。け
う。く。若。げ。あ。さ。ら。う。淡。若。ぞ。う。る。

風。さ。る。春。来。て。も。春。の。あ。る。は。ら
流。も。た。ま。く

非 春の。あ。さ。ら。う。柳。は。其。角
狂 あ。さ。ら。う。の。春。さ。ら。う。の。柳。は。其。角

歩。の。ね。紋。は。い。け。そ。あ。漱。口

詩 早春詞五字對句 同上

物外山川近

風光新柳報

春初景色新

宴賞百花催

詩 早春作

暢諾

獻歲春猶淺

年アチヌレト 園林

冰盡開

百花ア催ニストモ 雪和

新雨落風帶舊寒來

雪ハ雨ニト

風ハ未タ余寒

听鳥聞 雁着花

識早梅

飯雁早梅ニテ春 生涯知

幾日更被二年催

ル世ニ年々

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒

春ホ多クテまじふト云

鳥

鳥

入道大政大臣

為家

貞應百首

為家

美来つひは辺の氷

後柏原院

柏玉 餘寒雪

家隆

玉吟 溪餘寒

千載 餘寒月

為尹

詞 春を

春の清雪氷

衣

月

風

鳥

川

正月時令餘寒

正月十八

春のあめはついでに火をくわすもあつたの
きつてはなほやまぬけりてはなほあつた
さるるあじ。きつてはなほのそふあつたの
わじきつたふりる。やまをさやうぬ
狂きよりあつたをさうぬをさうぬ
あよりあつたあつた布子きつた

詩餘寒五字對句

同上

雪霽梅先發

山河雖度臘

春寒柳時催

雨雪未知春

詩餘寒七字對句

詩礎

澗道餘寒歷冰雪

門不開

石門斜日到林丘

何報春

疲馬山中愁日晚

冒余寒

孤舟江上畏春寒

春風寒

詩餘寒詞

張起

画閣餘寒在新年舊

燕歸寒ツヨク春ノケレキナ

ケレドモ二月ノナカバニ至レバ燕

ノ飛ビキタルコロニナレリ

梅花猶帶雪未得試春

衣 春半ニ至レトモ雪イテ夕

ニテイニダ春ノ衣

服ヲキテモ見ヌ也

狀餘寒之文 濃起天廣ス

頃日 倍ニ春寒ナ

起居 如何

冬作試候山く之

世嶺

雪未不消一の電音

積雪 須二弄翫

冬遠系仕ひる

麗藻ノ

吟々々々々々々

新賦了らハ 請フ示ニ

夜を存い

不候

尺牘 秘華七書替と記と

頃日 ①數日 ②儂春寒 ③麗藻新賦 ④新賦

起居 ①貴體盛壯 ②平安 ③無恙 ④千嶺

積雪 ①山頭白雪 ②窓前雪景 ③雪滿露 ④殘雪皎々 ⑤弄翫

想 ①想像 ②春々々 ③麗藻新賦 ④新詩龍劍

請示 ①擲示 ②曲許 ③不候 ④野生 ⑤小子

狀 餘寒之文返事 尺牘ハ漢文

如々々々々々々々々 未だ和氣

若諭雨雪未散

山林閑寂詩人感興

存望中有詩料而

恥魚著述 他日

得暖 御問焉

尺書 晉並 若論 蒙無命 敬示 兼告

雨雪未散 凍雲未暗 水雪 幽林

遂深山 閑寂 閑事 詩人 古人

感興 吟趣 函情 存翠 直若見 詩料 興

無著迹 手才器 他日 異日 上 吟日 向來 逐跡

得暖 候曉 往問 叩謝 問尋 桂訪

○年内こそも立春の節より
の餘寒とつぐべし正月元日と
ぎんも立春の節より前より
餘寒とつぐべし。今春
寒氣つとつぐべし。今春
○二月たりともいゆれば餘寒と
つぐべし。非諧の餘寒といへば
月の季より哥の春あり

春雪

△あは雪づきも春ふ
ふ雪といふあり

拾遺 抄 抄本人曆
梅のむすももさきとてさうこの
あまさる雪のさきとてさきとては

散木 山家春雪 俊頼
ふさくつらねる雪のつらねるつらねる
つらねる雪のつらねるつらねる

万葉
今さうに雪ふもさきとてさうこの
ゆりまじりてさきとてさうこのと

建保百首 春雪 定家
候雪の今もさきとてさうこのと
あのみさきとてさきとてさうこのと

新古今 二月雪落衣 康資母
梅の吹風もさきとてさうこのと
さきとてさうこのと

新拾遺 野春雪 覺譽
好色なまさきとてさうこのと
さきとてさうこのと

詞 春の雪とてさうこのと
さきとてさうこのと

春の雪とてさうこのと
さきとてさうこのと

春の雪とてさうこのと
さきとてさうこのと

春の雪とてさうこのと
さきとてさうこのと

山の草木もまがら流口のなを七山の姿もまがら笑ふやうなる物と云ふ

日待月待 此三夜北六夜毎月此事とあす人も有

と別て此月祭つゝはらる事を天地月日と祭るる六都て天子

の懺悔の罪甚し天子の天地の僭踰の罪甚し

諸侯の社稷を祭り大夫の五祀を祭ふとつゝ況士庶人と

敬ふ事人福をくして禍あり若くは邦の礼を失ふ祭らざる敬する

人の沐浴齋戒して朔日は朝日とをいし十五日月を拜せし理

不わして害さるるべし供物等用ゆる事あり江戸にては北二百廿

六日高輪鉄炮洲にて諸人群集して月を拜て是俗人の是非あり君子是を不習

草木

正月草木類此次不あるは二月の季つづきも不苦あり

松の花

異名黄花 若翠 松

△みどり立右つゞきも春あり若くは黄なるものあり是と松の花のよの一説は松の花は百年

一度ごとく日出度りのことつゞき連雪は花を染はるる松乃を色染す

非翠の松の雄松とてことよ思費狂草染るる松のみとりも春さへ

今下りの菓子れあらひ 止継 草庵 頰阿

君位といひも喜まふことありん

新拾 春松久緑 推家

松と君とのゆかりは乃の松と君とのゆかりは乃の松と君とのゆかりは乃

新古 松有春色 太政大臣 松母そ子代乃の松は乃の松

玉吟 松色添春

家隆

万代も終はらぬみらぬ松乃松

色いあ向のまをひまうて

同 春松契齡 後鳥羽院

交のし神路乃山の松ぬる務

我達のまをひまをかりり

新續古 庭松春久 左大臣

庭の面ふ木をひまの松みり

来しをまのまをひまをかりり

詩 採松葉

姚合

擬服松華無所學嵩陽道士

忽相教 松ノミトリヲ服食セント思ヘ

法ヲ思ヒヨラスニナヒウチタリトナリ

今朝試上高枝採不覺傾翻仙

鶴巢 今朝先試ニナラフタルトホリ高キ

カケズ窠ノ巢ノアヒ

アヒツクリカヘセシトミ

如龍 松ノ木ノ皮ノ中ニ脂アリテ

狀龍ノ如シト抱朴子ニアリ

化石 六帖ニ云ク回紇ノ拔河
ニ古ハ康干ト云フ川ア

リ松ヲ斫テ川ニ投入レテ三年ニ

ナレハ化レテ石トナル世ニ康干石ト云

奉朝正物アリ

十公 晏子固夢三腹上

公石在所リ 松生トミテ松字ヲ

別バ十八公ナレバ後十八年ニシテ

官位三公ニ登ラント云フ果シテ其

如シ 封大夫 秦ノ始皇泰山ニ

テ暴雨ニ逢ヒ玉

ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ

因テ其松ヲ封ジテ五大夫トス

靈巖寺 唐ノ玄奘西域ニ往

ナデ、曰ク吾西ニ去テ佛經ヲ求

本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長スヘシ

ト云フキニ去リケル後此松西ニ指ス一

年忽キ其枝東ニ向フ弟子等三

テ吾師歸リ来ルベシトテ

迎ヘ待クニ果シテ来ルカ

松品類

黒松雄松も
常の松も

赤松雌松も
葉細く柱
等小用て楠よりかき

朝鮮松本唐松の葉長
色をなれて遺実と松子と

五葉の松葉を多く
みどりかき色あかり

姫小松五葉の
似て葉をそ

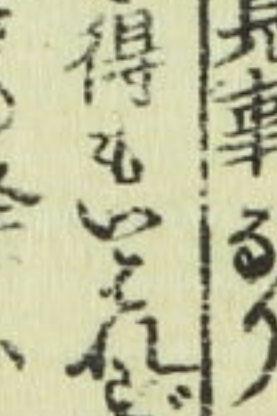
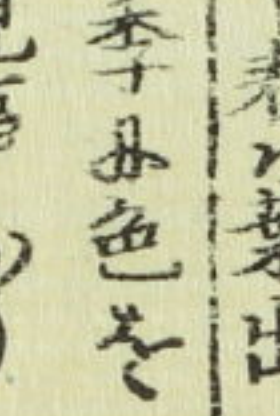
つら木もよく用て各
別の葉も多く花も用ゆ

駿州富士の辺多くあり故に富士松
も葉を多く短く青く春の葉出
て冬に落葉と此松四季の葉を

春の出葉は青く見事あり
夏もあがり秋黄く色ついでる

冬に落ちて落葉して雪の降る
と花も枝ふたまる

事なくしてかき



梅 昔へ本朝花と称するもの
梅の中世の花と云ふ櫻くらん

梅の種類 白梅 紅梅

江梅 花大くして 大梅 花大くして

行幸梅 花大くして 鑲梅 花中より

豊後梅 花大くして 軒端梅 花中より

鶯宿梅 花大くして 梅の種と云ふ物

飛梅 花大くして 難波梅 花中より

梅異名 水安 氷肌 玉瑞 瓊枝 玉肌

薄 逸民 雪魂 清容 木母 花魁

三凝紫 花儒者 好丈夫 故 繪首梅

香敷見草 此花 春告草 白州

連句 梅の 梅の 梅の 梅の 梅の

中垣の梅ふきはるまののえ 鬼貫
傍の梅て水は初と初乃梅 移竹
三味線も小あもの梅はむ来山

万葉

坂上即女

妻さるの梅さる宿の梅は花
ひよりるのや春日やうさん

夫木

為相卿

どうてえん初さの梅はるるあふ
茂くやうまを常の一えん

万葉

家持

みその小けりまの梅乃花を
あめはるあけり雪くありん

家集

西行

梅ごとくふとろふゆきとをて
入るびんより先よるう風

建保百首

定家

梅がやえうつろしん 紅梅
ふゆまはの梅乃や見え

新撰六帖

紅梅

信実

常の梅はるはるあ乃あろ枝
紅さす川不どのえやうるん

金葉

尋梅

為道

梅はるてしめくのもこそ梅のむ
そふともいひはるあひさめん

夫木

春朝梅

家隆

梅づつあふの里乃梅さるる
マそくは人も神白より森

新勅

夜梅

前実白

梅が香もあまはる月ふまづつ
それともあへどうはむころうき

夫木

夕梅

為兼

曉の風をまよひてあま乃花
このゆふをふそやけそあめる

家集

山辺梅

仲正

よのつひれつす本はらうしん
梅乃白ひをたさりのふせん

家集

垣根梅

仲正

白ひあを焼かをよめあま
垣根乃梅のころうるりたり

夫木

家梅始聞

能因

去はるあひもあふいつか
ふ花雲の雲さるあま

玉吟 曉梅

家隆

春のよのおろろ月夜の梅は
庭の中にて中明かきそ

夫木 道梅

法印定軌

乃の乃行雲山のうそれくふ
たらふはさうりま風をふく

白川

梅移水

頭輔

笑日よりむのを忍くもゆるか
梅のうたゆく意乃中り水

家集

湖辺梅

定家

々みそくふ志賀ははあまは運を
雪さそくふ那のあまへり

玉葉

月前梅

宗尊親王

梅が香ハアツク春はさうふて
若乃たりとくとい月をけ

新續古

海辺梅

有親

延虫人のくくし社も白くし
新波乃まき梅のうたう勢

夫木

野外梅

光俊

志保入の子枕は社の梅をさか
ねて乃新波は社ふりあり

詞 くれさあ。うらね。こそあ。白

咲らる。白く。窮く。やまむつら

うつらよ。つらく。一筆。八筆。あちえ

志のえ。あちえ。折山。谷。園。時。やが

きの梅。花のうらえ。踏こりていふ

作多の垣根は梅。軒新波の梅。朝

の梅を。窓裏の梅を。まどらら

南は花垣。垣根の梅。鶯もぐり。唱

て梅も。野風も白く。梅も。その

ゆふも。梅は花を。夕陽。柳枝の

と。春風。白く。梅も。白く。そと

さく。白く。風も。月。白く。何む。

それ。も。白く。梅。新。雪。り

る。朝。日。白く。新。雪。の。梅。雪

ま。うら。白く。白く。書。は。中。う

咲。夜。交。を。白く。白く。梅。白

さ。の。梅。白く。雪。の。あ。袖。白く

と。うら。人の。うら。神。の。香。身。白

ね。白く。梅。が。香。白く。そ。う。う

や。白く。人。賤。志。の。新。雪。梅。の。雪

冬春のそと 梅 正八十一
冬春のそと 梅 正八十一
冬春のそと 梅 正八十一

詩 梅ノ詞

張籍

自愛新梅好 行尋一徑斜

梅ノ花サカリヲシタヒ往來心ニカケテ
小路ヲ横ニニカリミチヲツヅル
不激入掃石 恐損落來風

ノ石ヲハラフテラカズハ風ニ落松
シタル英ヲクミツセンモノヲトナリ

詩 梅ノ詞

唐 彦謙

欲寫愁腸愧不才 愁ノコロハイ
思ヘトモ身不肖 多情練灑已低

催云ロベタキコトハカクアリアヒニ詞
ニイロイダサントモヨクストナリ

窮郊二月 初離別 故郷ヲバ二月
比ニ別レテモ

サビシクナツカ 獨倚寒村 鷓野梅
シキトナリ

詠ノ香ヲカイデ 君ヲ思フアリ

詩 梅花七字對句

詩礎

柳條咲色不忍見 無數梅

梅花滿枝空斷腸 點入衣

寒澗渡頭芳艸色 弄綺梅

春梅山嶺上 鵝鳴聲 正調梅

詩 梅花五字對句 同上

梅花交近野 梅靜澄窓影

草色向平地 春明發筆光

梅故事 羅浮夢 陪の趙師雄 日暮て羅

浮山の松間ニ酒肆ある所ニ氷粧素
服ヤ美女と語り芳き香人を襲ふると

うらむ酒肆と叩きて共ニ酒と香

醉臥く朝小起あがり見をば梅樹

梅曆

山中并住居

の下にありて酒肆
も美人もさしぞ
て春の至るとも
を見て春とあつとあるは梅花曆と云

詩話

蘇東坡の妹好んで詩と
作をて東坡はまきり

山谷東坡の會して詩と作る時
東坡 和風揺細柳澹月映梅

と作る妹の云く未可あふべし
大母笑ふ山谷是を見て唱へて

和風舞細柳澹月隱梅花
と作はる妹見て必し可くと

東坡山谷の兩人妹ふむらふ
汝ら句いふんと問ふ妹詩と即時作

和風扶細柳澹月失梅花と
作り去らふ二人も大感とと

好文木

晋の哀帝書とふ時ふ
四時とも梅の花開ふ

たうとつらう故ふ好大木と異名
梅譜は梅の花の備書とつらう

節分草

花は白花ふて一莖ふ
葉と出し立春の頃さくさく故

節分草とさういふ排諸節
分十二月の季ゆは是も名

よつ十二月ともは所存
土筆

土筆

筆つたふ南方の諸祭
生を形筆乃如高

福壽州

元日小花さくゆ
元日

詞 春の明が。若水今朝春雨
非 佐保姫の多ひゆは後

狂 咲かむ梅はま怒のりる
後芳さくく咲みけしる米都

詩 福壽州五字對句 同上

淑氣煙相喜 瑞凝三秀州

風光草尚榮 春入万季秋

詩 福壽草七字對句

詩 礎

豈知玉殿生三秀

瑞色鮮

詎有銅池出五雲

動三辰

草芽半吐參差碧

知春歸

花蕊初開淺淡紅

嬌朝花

淺黃福壽草二重



八重福壽草八重



聖粟新葉

九月小種

若草

初草

家集

為家

春日野のみひよりまにつあがれて
たけもとをまびあさる春約

詞 けのたさを。あさの庭。あさの
あさのあさ。けのあさ。あさのあさ。

高きせつろく。みく。庭。あさのあさ。

くさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

あさのあさ。あさのあさ。あさのあさ。

河梁馬首隨春草 春艸深

江路猿声愁暮天 百草生

曲江春草

鄭谷

花落江隄族暖烟 雨餘艸色遠

相連春雨 芳草和煙 暖更香 閑門要路

詩々破留與遊人一醉賦

青タル草ノ上ニ車ヲキレラセ草ヲヤ

フリツコナフコナカレ野遊ノ人々ニ

トメヲキアタメントナリ

唐羅鄴

芳草和煙暖更香 閑門要路

一時生 芳草ハヒロガリテ隱年々

點簡人間事 惟有春風不

世情 世間ニスノバ年々世話ノ

界ニテハタゞ春風ノ

フクニオカスノこと

下萌 冬かきこる草の春の出

發の氣のよして下まき出

網外面の處の春の雨をどよむの詞

新古今やがれも州なりあふす日

世とてまをれ日をもくせしうあ

木芽立 △木の芽 △木の芽の芽

非の木の芽かき 女羅 木芽漬

非 植愛のやま 蕪堀 けいふん

草木のきりぬぐり芽と生

ぶるといへ何州つけくもひと

春の艸のつるれは春季といひ

秋の艸木のつるれは秋の季いぬら

水菜 △水入菜といひり 京都近

萱 蔓青の苗△萱子 本草心 苗と食ひ初夏ゆくと

蕪菜 苗二 ① けりや医家の ② して又て春翠

路臺 △秋冬花△この草 とも云 ① 苗のそ

田すく △田すく△畑すく △畑すく△田すく

野大根 △野大根 △中比△野大根 △中比△野大根

生類 正月の部ありこの部 ① 卵有二月△遺ても不

猫は妻乞 △猫は妻乞 △二月とある書も ① 前も年越し

前後より戀ひ初るかり春秋 二度さる春は牡牝を喚び秋は 牝牡と喚んで乳で子を生とすく きて寒氣とやがるものや秋子の

多く育らかり孕て六十日して 産じ生まで七日にて腹をさき

飯とく二月半まで掛目百 目さる有て乳をさめてもよく

その鼻の尖つひ冷る夏至 五月一日さる煖なり鼻を食ふ

上旬よ頭より下旬よ尾より 食ふ猫の眼まで時刻とある哥

六ツ圓く五八王子小四七 株の実 夕九ツ針産又唐糸竹嶋猫

の二種あり ① 糸まき ② 糸まき

といわくの糸は糸のひげに 糸は糸のひげに糸のひげに

糸のひげに糸のひげに糸のひげに 糸のひげに糸のひげに

糸のひげに糸のひげに糸のひげに 糸のひげに糸のひげに

糸のひげに糸のひげに糸のひげに 糸のひげに糸のひげに

糸のひげに糸のひげに糸のひげに 糸のひげに糸のひげに

糸のひげに糸のひげに糸のひげに 糸のひげに糸のひげに

此系にありある生類を鼻のうらみ入を猫たちをいふ

白魚 異名 鱸 鱸魚 鱸目 指所

夫木の宗尊親王

白魚の所并れ内ふりてそ代と治むべきことあり

朝鷹 右昔春の季貞徳の

すこさけ 置未明 行て鳥を鳴

鳥狩ともさすへ鳥とも朝鷹がりとともいふ

さすといふもののなりぬやうに竹をくの枝と事事

堀川 やく 源頼政 の鷹とるふを釣

そが あく 京に さく ともあり

詞狩人 鳥 志保 あり 橋 かり あり

け子 約 くり 名 たる 神 の 春 風 菜

松 なる 日 花 の ぐ 春 の 時 分 候

くす 神 の 風 鷹 む 入

非 胡 乃 の 息 そ 二 の 里 そ 二 の 葉 そ

胡 夜 乃 か ち も 鹿 も 小 の 乃 り 貞 徳

系 り 尾 は 乃 む 心 を 時 小 琳 李

繼 尾 鷹 尾 一 條 帝 の 御 時 源

鶴 の 二 み 乃 は 乃 て 白 き 羽 を 雪

つ き 久 し 乃 り 鷹 の 己 が 尾 を 雪

と 見 て 山 へ 入 る 心 乃 し 乃 と 乃 と

乃 の 乃 け 乃 の 乃 の 乃 を 乃 を 乃 を

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の 乃 の

俳龍も括りけり 浅刺 大さき
ありさうり時 蛙々

の如くはて色ハちでみ同
事なり。そひかりして美多き

飯銷 (異名) 鱒魚 正二月の内盛
ふ出るりのありたこの

肉のしるりやれれゆへ名づく
非 俗嫌や入るのふくまぬ内 誰烈

春駒 春ハ諸州生出故駒
野とあれすかり草と

喰ふより。諸家ハ養ひおこ
さる馬も初春ふりすはるる

野と喰ふ野のこゝ哥ハ春の
野ふわれゆくををよむ。俳

識ハ春駒とハハ初春の春
駒舞とるは春駒舞のこゝ

初春の部ふづり
春駒。春駒舞のさうろを
らんぐよみあふ屋

俳 是約のさうろは名お察宗阿

必用

此部より正月一ヶ月の天
氣の見よ其外必用の事あり

破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
軍	丑の方	寅の方	卯の方
星	辰の方	巳の方	午の方
向	朝六ツ	朝五ツ	朝四ツ
方	未の方	申の方	酉の方
角	戌九ツ	亥八ツ	子七ツ
	戌の方	亥の方	子の方

右の如く正月酉の刻は破軍の
斂鋒セの方ハ向ハ戌の刻

寅の方ハ向ハ亥の刻 時辰の方
小向ハ次兼ハ順ハ一時宛とゆり

酉の時より操出と事ハ星ハ夜と
生るゆへ暮六ツ時より出初

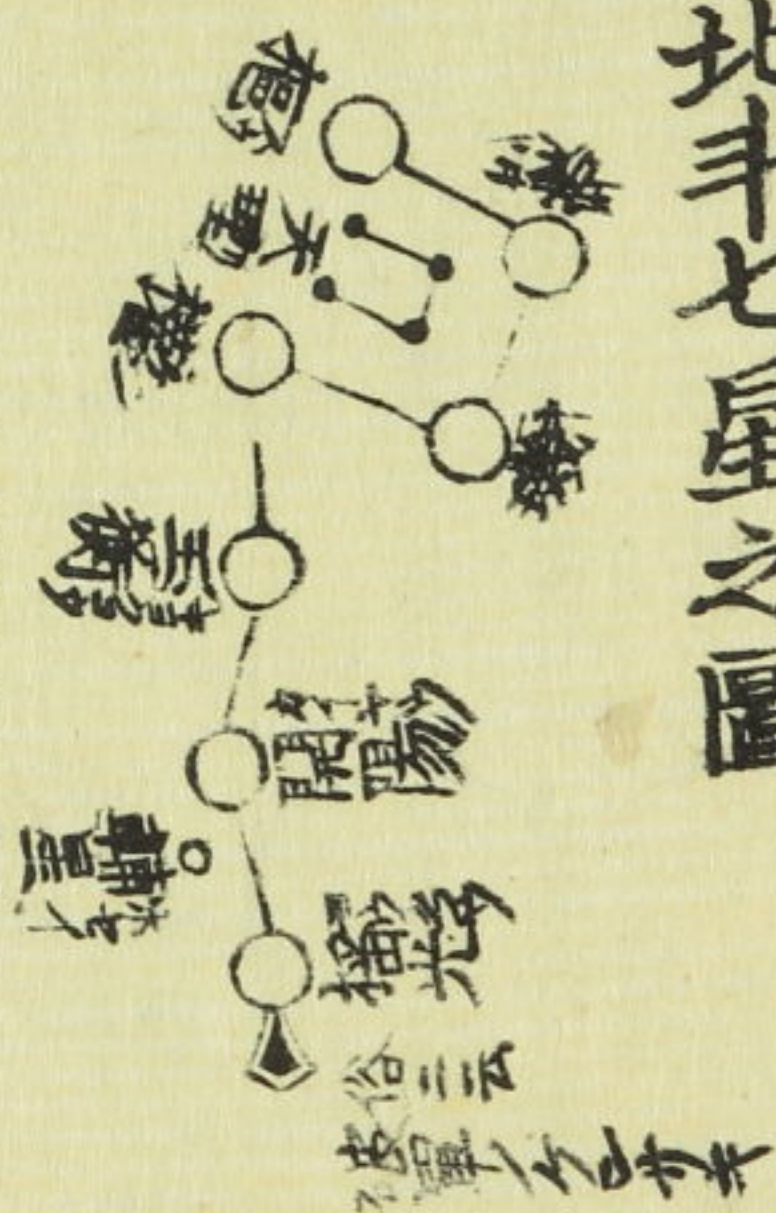
破軍のたぐは向ハ方へむい合
ふありて争論又何事ハとす

万事利ありは是天地の氣合の
應じたる處をい能々けむべ

○三才圖會曰く昔唐虞の世ハ正
月酉の刻ハ破軍星寅の方ハ向

と云ふも夫より年数久しくつりて天の旋火宛替りて今もその口ふのづからさうく向ふかり日本ハ神代より正月を寅の月と定む北斗を見禁ずゆれば時刻を知らば晴雨とも知るべしされがため其星のあり所と圖かあはす

北斗七星之圖



第一の星と樞と云第二と璇と云第三と璣と云第四と權と云第五と關と云第六と開陽と云第七と天樞と云

天氣

北斗魁星の間黒くほや光りてあは雲傍小

あまの其夜雨ふる○北斗の前は黄さる雲氣あまの翌日風ふくもほや光りてあまを其夜大よ雨ふる○黒く黄よ白キほや光りてありて長さ三文余りあまのく北斗をまといて散ざまは三日の内ふる雨降りさるけま人安和あり事なり○り雲氣北斗をまといて蒼黒さ大よ雨ふる思ろさの風多し黄白されの翌日大に熱し○白氣ありて北斗の前と大風ふく事を主る是正日にぬさる月のふて北同し事○今月楢びろ有る人民小歎あり○今月上旬小丙寅の日あまの夏雨多し戊寅の日あまの秋雨多し

天氣占候

今月上旬雨多し中旬の米價貴し

うぐいすのこをすうまを銅をくし
 七すい煮る。○のり鯛を
 片う子とふたうすきうゆ
 いておひくを出さぬ鯛も子
 も入らして出して出さぬすじ
 ていあし。○そのうこいうこ
 せんはさぎこよくゆにしてく
 ちうゆくと七出さ。○あんう
 汁のうこく死あち一切てか
 も身とも少湯へ入さくこ
 時あけて水もろろ其後酒
 をかけ置きて汁少立んこ
 魚を入時鳥 ほんかんか
 野菜 ふきうどまぶあさ
 ぼうまんさう。いんをふさぬ
 ちんさ。ちんこかう。はくく
 うこぎ。たんや。えん草。水
 ちんろ。さのめ。うがいす
 正月

煮凍物

重徳 ひとひね 推
 小針 口 かけ

さんま さんかん くりぬ
 ちんめ ちんめ ころなけ

漬物 ちんめ ちんめ
 ひのいも ちんめ ちんめ

うど ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

生貝 ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

白炙 ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

小串田糸 ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

車多ひ ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

ちんめ ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

ちんめ ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

ちんめ ちんめ ちんめ
 ちんめ ちんめ ちんめ

精進 膳 料理 大いん 推し

うい 大いん 推し 大いん 推し

大いん 推し 汁 大いん 推し

大いん 推し 大いん 推し

竹 大いん 推し 大いん 推し

煮物 大いん 推し 大いん 推し

大いん 推し 大いん 推し

和物 大いん 推し 大いん 推し

大いん 推し 大いん 推し

大いん 推し 大いん 推し

大いん 推し 大いん 推し

